

0 10m

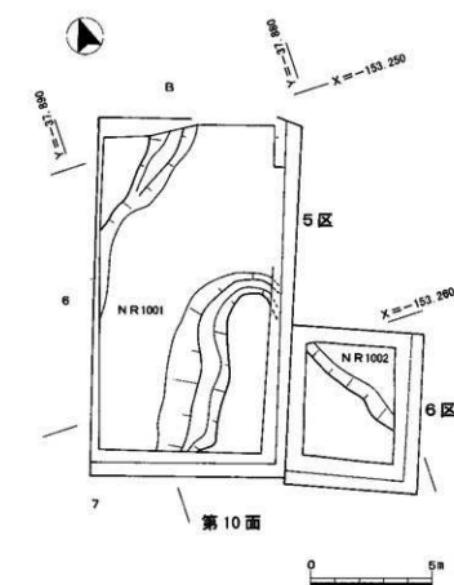
第10図 5・6区 第6～9面検出構造平面図 ( $S=1/250$ )

III 久宝寺遺跡第39・51次調査(K日2001 39・2003 51)

ある。土坑の底部から出土した。口縁部の約1/3が残存している。復元口径10.0cmを測る。2は椭口縁部の約1/8が残存している。復元口径12.0cmを測る。色調は共に黄橙色。胎土は共に精良である。共に、佐藤隆氏編年(佐藤1992)の平安時代Ⅲ期古(10世紀末~11世紀初頭)に比定される。平安時代後期に比定される。

S K102(第12・13図、図版二・二三)

1区西部北壁内のⅦ-6-5G地区で検出した。南部は北側溝に切られるため詳細は不明であるが、平面形状は南北に長い楕円形と推測できる。検出部分で東西幅0.5m、南北幅0.3m、深さ0.3mを測る。埋土は細砂を少量含む5Y4/1灰色シルト混板細粒砂である。平安時代中期の土師器が少量出土している。土師器2点(3・4)を図化した。3は土師器底の小片である。復元口径12.0cmを測る。外面

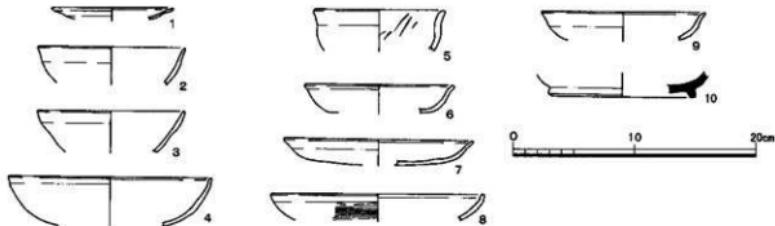


第11図 5・6区 第10面検出遺構平面図(S=1/200)

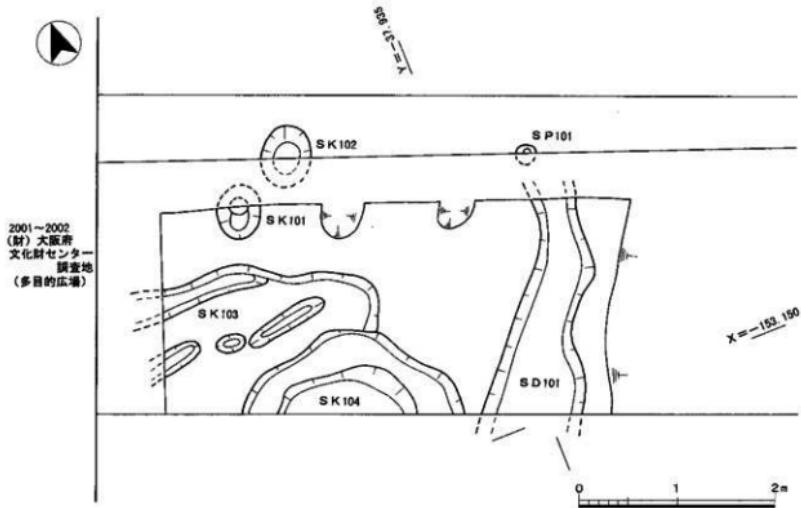
は口縁部がヨコナデ、以下指頭圧痕を残す。4は土師器中皿である。復元口径16.7cmを測る。共に色調は赤褐色。胎土は3が精良、4には0.5~3mmの長石が散見される。佐藤編年(10世紀末~11世紀初頭)を中心とするものと推定される。

S K103

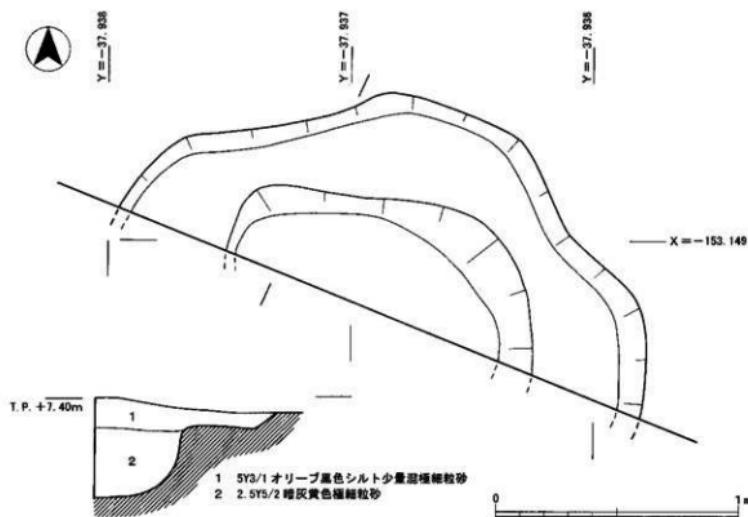
1区西部のⅦ-6-5G地区で検出した。西・南部は調査区外に至り、さらに南部はS K104に切られる。平面形状はやや歪な方形を呈するものと思われ、検出部分で東西幅2.9m、南北幅1.55m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が粗粒砂を少量含む7.5Y4/1灰色シルト混板



第12図 S K101(1・2)、S K102(3・4)、S K104(5~10) 出土遺物実測図



第13図 1区 第1面平面図



第14図 SK104断面図

粒砂で炭を含み、下層は粗粒砂を少量含むシルト混極細粒砂でシルトの小さなブロックを含む。上坑の底には東西方向に伸びる浅い溝が2条存在する。遺物は奈良時代の土師器、須恵器が出土しているが図化し得たものはない。

#### S K 104(第12~14図、図版二)

1区西部のⅧ-6-5 G地区で検出した。南部は調査区外に至るが、平面形状は円形と推測される。検出部分で東西幅2.3m、南北幅0.85m、深さ0.42mを測る。断面形状は上面から約0.13mまでは緩やかな傾斜をもち、平面中央付近ではほぼ垂直に掘り窪められている。埋土は2層に分けられ、上層が5Y3/1オリーブ黒色シルト少量泥極細粒砂で2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂の小さいブロックを含み、下層は2.5Y7/2灰黄色粘土質シルトである。遺物は奈良時代後半の土師器、須恵器が出土している。6点(5~10)を図化した。全て小破片で全容を知り得たものはない。5は土師器の小形壺で壺Bにあたる。復元口径10.8cmを測る。6~9は土師器皿Aである。復元口径12.3~17.5cmを測る。口縁端部付近で小さく外反して、端面内側に沈線が巡る6・7・9と端面内側が小さく肥厚する8がある。10は須恵器杯身の小破片である。復元底部径12.2cmを測る。時期としては平城宮土器IV(8世紀後半)が考えられる。

#### S K 105

2区中央部のⅧ-6-6 I・J地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するものと推定されるが、南端が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.6m、南北幅0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が少景出土しているが時期を明確にし得たものはない。

#### S K 106

2区中央部のⅧ-6-7 J地区で検出した。南部が調査区外に至る。検出部分で東西幅2.0m、南北幅0.7m、深さ0.11mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が1点出土したのみである。

#### S K 107

S K 106の北に隣接している。北部が調査区外に至る。検出部分で東西幅2.3m、南北幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの単一層である。土師器、須恵器の小片が少量出土しており、その中に7世紀代の須恵器杯身片が含まれている。

#### S K 108

2区東部のⅧ-7-7 A地区で検出した。北部でS K 109を切る他、南端が調査区外、東部が搅乱を受けている。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.6m、深さ0.3m以上を測る。埋土は2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していないが、切る関係にあるS K 109から江戸時代中期の遺物が出土していることから、構築時期はそれ以降が推定される。

#### S K 109

2区東部のⅧ-7-7 A地区で検出した。北部が調査区外に至る他、南部はS K 108および搅乱により切られているが、検出された形状からみて隅丸方形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅2.3m、南北幅1.4m、深さ0.23mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする2層から成る。遺物は須恵器片、京焼碗、平瓦片が出土している。江戸時代中期以降の遺構であると推定される。

### S K110

2区東部のⅦ-7-7B地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、東西幅1.2m、南北幅1.3m、深さ0.21mを測る。埋土は楕円形を呈する断面形状に沿って砂質シルトを主体とする2層が堆積している。遺物は土師器、須恵器の小片の他、14世紀前半に比定される瓦器楕片等が極少量出土しているが図化し得たものは無い。

### S K111

S K110の東に隣接している。不整円形を呈するもので、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.23mを測る。埋土はU字形を呈する断面形状に沿って砂質シルトを主体とする2層が堆積している。遺物は土師器片の他、瓦器楕片が極少量出土しているが図化し得たものは無い。

## 溝 (S D)

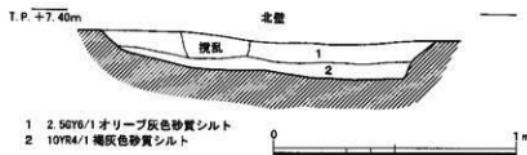
### S D101

1区のⅦ-6-5・6G地区で検出した。南北方向に伸びる溝で、南部は調査区外に至る。北部は北壁断面にS D101の埋土が存在しないことから、S D101は北側溝内で終了するものと推定される。規模は検出長2.35m、幅0.4~1.05m、深さ0.08~0.20mを測る。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂の小さいブロックを含む5Y3/1オリーブ黒色シルト少量混入細粒砂である。遺物は土師器の小片が出土しているが小片のため時期は明確でない。

### S D102~S D123

2区では総数で22条(S D102~S D123)の溝を検出した。そのうち、調査区東部で検出した南北方向に伸びるS D108~S D123の溝群が耕作に関連した溝と考えられる。構築時期は近世時期が推定される。S D108より西側で検出された溝のなかでは、S D105とS D107から遺物が出土しており、S D107からは古墳時代中期に比定される土師器壺・甕・高杯の小片が出土している。出土遺物を掲載した遺構はS D107(第16図)とS D123(第17図)である。なお、各溝の法量等の詳細については第2表で示した。

第2表 2区 第1面溝法量表(単位m)



第15図 S D107断面図

遺構名	地 区	全 長 (検出長)	幅 (最大)	深 さ	埋 土	出 土 遺 物
S D102	Ⅶ-6-6I	2.10	0.70	0.13	N5/0灰色粘土質シルト	
S D103	Ⅶ-6-6I	1.10	0.32	0.07	2.5CY6/1オリーブ灰色砂質シルト	
S D104	Ⅶ-6-6I	2.45	0.50	0.12	タ	
S D105	Ⅶ-7-7A	2.10	0.35	0.16	タ	土師器
S D106	タ	2.00	0.30	0.21	タ	
S D107	タ	2.00	1.45	0.27	タ	土師器
S D108	Ⅶ-7-7B	1.20	0.40	0.14	タ	土師器、須恵器
S D109	タ	1.25	0.70	0.09	タ	土師器
S D110	タ	2.00	0.50	0.11	タ	

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D111	VII-7-B	2.00	0.40	0.06	2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト	
S D112	タ	2.00	0.50	0.20	タ	土師器、須恵器
S D113	タ	2.00	0.35	0.09	タ	土師器、須恵器
S D114	タ	2.00	0.35	0.10	タ	須恵器、瓦質土器
S D115	VII-7-7-BB	2.00	0.21	0.13	タ	
S D116	タ	2.00	0.30	0.13	タ	土師器、須恵器
S D117	VII-7-7-BC	2.00	0.31	0.14	タ	土師器、須恵器、瓦質土器
S D118	タ	2.00	0.31	0.18	タ	土師器
S D119	タ	2.00	0.40	0.13	タ	土師器、須恵器、瓦器
S D120	タ	2.00	0.20	0.06	タ	土師器
S D121	タ	2.00	0.32	0.10	タ	
S D122	VII-7-8C	2.00	0.90	0.15	タ	土師器、須恵器
S D123	タ	2.00	1.00	0.12	タ	須恵器、瓦質土器

## S D124～S D129

3区の北部で検出した。全て南北方向に伸びるもので、1区の東部で検出したS D108～S D123と同様の耕作溝と考えられる。規模はS D124やS D125のように、やや幅広のものを除けば、幅0.3～0.6m、深さ0.05～0.1m程度のものである。遺物としては、小片化した土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、国産陶磁器等が出土しており、構築時期は近世時期が推定される。なお、各溝の法量等の詳細については第3表で示した。

第3表 3区 第1面溝法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D124	VII-7-8CD	2.00	2.50	0.28	10YRS/1褐色灰色砂質シルト 5Y7/2灰白色板縫粒砂 5Y6/1灰白色細粒砂	土師器、須恵器、 国産陶磁器
S D125	VII-7-8D	2.00	2.00	0.26	10YRS/1褐色灰色砂質シルト 2.5Y7/1灰白色砂質シルト 2.5GY7/1明褐色リーブ灰色 砂質シルト	土師器、須恵器、 国産陶磁器
S D126	タ	1.80	0.60	0.10	10YRS/1褐色灰色砂質シルト	土師器、須恵器、瓦器
S D127	タ	2.10	0.30	0.05	タ	土師器、須恵器、瓦質土器
S D128	タ	2.80	0.40	0.05	タ	土師器、須恵器
S D129	タ	2.20	0.30	0.05	タ	土師器

## S D130

4区南部のVII-12-4C地区で検出した。ほぼ南北方向に伸びる。検出長8.0m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。直上まで搅乱が及んでいるために不明瞭であるが、溝を挟んで西側は0.4m以上高くなっている、鳥糞の端や畦・道路等の区画溝の可能性がある。埋土は上から5BG6/1暗青灰色雜混砂質シルトと5BG5/1青灰色粘土質シルトのブロック、N8/0白灰色微砂と2.5Y8/8黄色粗粒砂の互層、10YR5/1褐色粘土質シルト・N6/0灰色微砂と植物遺体の互層からなる。遺物は出土していない。

## S D131

5区の南部から6区の北西部のVII-12-6A、7A・B地区で検出した。L字状に伸びるもので、検出部分で東西長9.5m、南北長3.0m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は10Y4/1灰色粘土

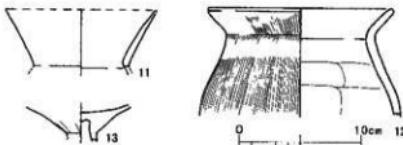
質シルトと10Y6/1灰色シルトの互層である。内部から土管の破片が出土しており、位置からみて旧国鉄の駅舎等に付随した近代の遺構と考えられる。

#### S D 107出土遺物(第16図、図版二三)

土師器3点(11~13)を図化した。11は土師器直口壺の口縁部の小破片である。全体に風化が進行しており器面調整は不明である。色調は赤褐色。胎土は精良である。12は土師器長胴壺の小破片である。口縁部は「く」の字状で復元口径15.3cmを測る。器面調整は外面が口縁部から体部にかけて縦位に密なハケ、内面は口縁部から体部上半ヨコナデ、以下ユビナデを行う。色調は灰白色。胎土は粗く1~2mmの長石・チャートが多く含む。13は土師器高杯の小破片である。おそらく椀形の杯部を有するもので、脚部は中空である。色調は赤褐色。時期的には古墳時代中期末に比定されよう。

#### S D 123出土遺物(第17図)

瓦質足釜1点(14)を図化した。口縁部の約1/8が残存している。復元口径16.3cmを測る。内湾して伸びる口縁部で端部は丸みを帯びる。鋲は水平に短く貼り付けられており、断面形状は三角形を呈する。器面は風化が著しく特に外面の退色が顕著である。色調は淡灰黒色~淡褐灰色を呈する。時期的には13世紀代のものであろう。



第16図 S D 107出土遺物実測図



第17図 S D 123出土遺物実測図

#### 落ち込み(S O)

##### S O 101

5区西部のVII-12-6 A・B地区で検出した。埋土は10Y4/1灰色極細粒砂~中粒砂混粘土質シルトで搅拌を受けた層である。耕作に伴うものと推定される。

##### S O 102

5区南端のVII-12-7 A・B地区で検出した。南は調査区外に至るために、全容は不明である。埋土は10Y4/1灰色極細粒砂~中粒砂混粘土質シルトで搅拌を受けた層である。性格的にはS O 101と同様である。

## 第2面(第6・7図、図版五~七)

1・2・5・6区で検出した。第4層および第7~6層上面(T.P.+7.5~7.2m)を構築面としている。検出遺構には、井戸1基(S E 201)、土坑2基(S K 201・S K 202)、溝13条(S D 201~S D 213)、小穴8個(S P 201~S P 208)、自然河川1条(N R 201)がある。時期的には、古墳時代中期~平安時代末期のものがある。

## 井戸 (S E)

## S E 201

1区中央部のⅦ-6-5・6G地区で検出した。南部は調査区外に至り、さらに東部は搅乱を受けている。平面形状は不明である。検出部分で東西幅1.2m、南北幅0.5m、深さ0.75mを測る。断面形状は垂直の掘方を持つ。埋土は3層に分けられ、上層は2.5Y5/2暗灰黄色シルト混粘細粒砂のブロックと7.5Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルトのブロックが混在しており、中層は5B4/1暗青灰色極細粒砂のブロックと7.5Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルトのブロックが混在しており、下層は7.5Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルトのブロックでN6/0灰色中粒砂のブロックが混在し、いずれの層にも7.5Y7/1灰白色中粒砂のブロックを少量含む。遺物は土師器の小片が出土しているが小片のため時期は明確でない。

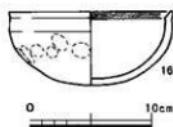
## 土坑 (S K)

## S K 201(第18図、図版五・二三)

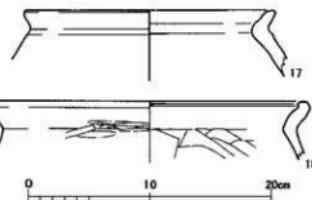
1区北西部のⅦ-6-5G地区で検出した。西壁面の除去中に検出したものであるため、本来の掘方は検出できていない。南部はS K 103、遺構上面はS D 201によって搅乱を受け、西部は調査区外に至る。平面形状は東西に長い楕円形を推測でき、検出面での法量は長径0.54m、短径0.6m、深さ0.42mを測る。埋土は2層で、上層は炭を含む5Y4/1灰色極細粒砂質シルト(やや粘質)で、下層は5Y5/1灰色シルト混粘細粒砂である。遺物は上層から古墳時代中期後半の土師器、須恵器、製塙土器等が出土している。土師器2点(15・16)を図化した。15は土師器直口蓋で口頸部を欠く。体部は扁球形で完存している。体部最大径14.4cm、体部高9.9cmを測る。器面調整は風化のため不明。色調は明赤褐色。胎土中に0.5mm以下の長石を多く含む。16は土師器鉢である。半球形の体部から小さく外反する口縁部が付くもので、端面は内傾する。完形品で口径13.3cm、器高6.0cmを測る。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部内外面は指頭圧成形後ナデを施す。色調は淡灰褐色。胎土は精良である。時期的には古墳時代中期中葉(5世紀中葉)に比定される。

## S K 202(第19・20図、図版七・二三)

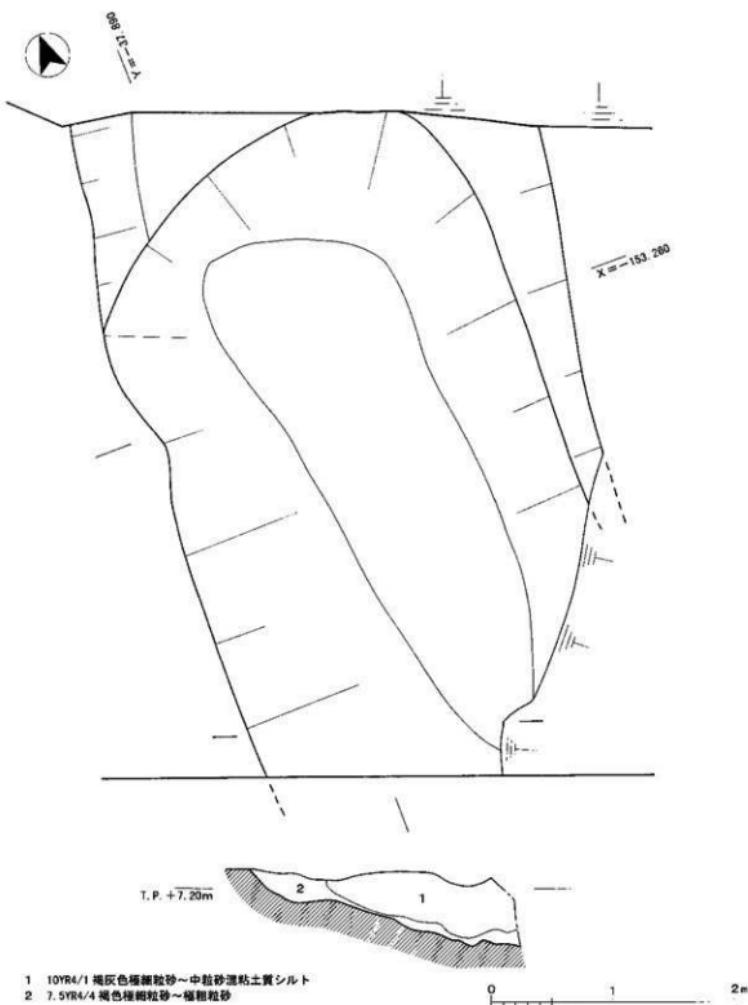
5区の中央部以西のⅦ-12-6A・B、7A・B地区



第18図 S K 201出土遺物 実測図



第19図 S K 202出土遺物実測図



第20図 SK 202平断面図

で検出した。南北方向に溝状に伸びるもので、北は擾乱、南は調査区外に至る。検出部分で東西幅3.5m、南北幅5.6m、深さ0.6mを測る。埋土は2層から成る。遺物は、土師器、須恵器、屋瓦等が出土している。土師器土釜2点(17・18)を図化した。共に口縁部の小片で、復元口径は17が20.3cm、18が25.5cmを測る。口縁部は共に「く」の字に屈曲するもので、端部が丸みを持って終

わる17と内側に肥厚して終わる18がある。色調は17が赤褐色、18が淡灰褐色である。胎土は18が精良、17はやや粗く1mm大の長石・チャートが散見される。森島康雄氏編年(森島1990)では17がA型式(河内産)、18がC型式(大和産)に分類される。時期的には12世紀代のものである。

#### 溝(S D)

##### S D 201(第21図、図版五・二三)

1区西部のⅦ-6-5 G地区で検出した。南北方向に伸びる溝で南、北部ともに調査区外に至る。第4層上面で検出したが、本来の構築面は上層の第3層である。検出部分で検出長2.2m、幅1.3m、深さ0.45mを測る。埋土は5層に分けられ、1層が2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂質シルト、2層が5Y5/1灰色極細粒砂少量混シルト、3層が2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂混シルト、4層が極細粒砂混粘土質シルトのブロックを含む10Y4/1灰色シルト混極細粒砂で、さらにラミナ状の10Y6/1灰色極細粒砂が見られ、5層が極細粒砂混粘土質シルトのブロックを含む粘土質シルト混極細粒砂で、植物遺体を含んでいる。遺物は飛鳥時代後半に比定される土師器、須恵器が出土している。2点(19・20)を図化した。19は土師器杯Cの小破片である。復元口径9.0cmを測る。20は須恵器杯である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径10.3cm、器高3.3cmを測る。時期的には飛鳥IV(7世紀後半)に比定される。

##### S D 202

2区東部のⅦ-7-7 A・B地区で検出した。概ね東西方向に伸びるもので、検出長12.4m、幅0.6~2.2m、深さ0.21~0.61mを測る。埋土は2層で上層が10YR5/1褐色砂質シルト、下層がN8/0灰白色極細粒砂である。遺物は5世紀代の土師器高杯、須恵器片等が少量出土している。

##### S D 203

2区東部のⅦ-7-7 B地区で検出した。南北方向に伸びるもので北部はS D 202に切られている。検出長3.1m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

##### S D 204

2区東部のⅦ-7-7・8 B地区で検出した。北西-南東方向に伸びる小溝で東端はS D 205に切られている。検出長2.1m、幅0.3m、深さ0.13mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土したが時期は明確でない。

##### S D 205

2区東部のⅦ-7-7・8 C地区で検出した。南北方向に伸びるもので一部枝状に伸びる部分がある。検出長1.95m、幅1.1m、深さ0.09mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

##### S D 206

3区北東部のⅦ-7-8 D地区で検出した。溝内にS P 208が存在している。南北方向に伸びるもので、検出長1.8m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色中砂混砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。



第21図 S D 201

出土遺物実測図

## S D 207

5区東部のVII-12-6・7B地区で検出した。南北方向に伸びる溝である。検出長2.7m、東西幅0.7m、深さ0.15mを測る。埋土は5Y4/2灰オリーブ色細粒砂～中粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は土師器と須恵器の小破片が少量出土している。

## S D 208～S D 213

6区北部および西部で検出した。南北方向に伸びる小溝が中心であるが、調査区内の1/2以上が擾乱により削平されており、中央部より東、南部が不明である。規模、形状から見て耕作溝と考えられる。遺物は古墳時代前半の土器が出土しているが、第5層からの混入であり帰属時期を示すものではない。なお、各溝の法量等の詳細については第4表で示した。

第4表 6区 第2面清法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋 土	出土遺物
S D 208	VII-12-7B	3.25	0.72	0.05	2.5Y4/2黄灰色粗粒砂～中粒砂混粘土質シルト	
S D 209	タ	1.40	0.36	0.08	タ	
S D 210	タ	1.35	0.42	0.21	タ	
S D 211	タ	1.22	0.62	0.11	タ	
S D 212	VII-12-7C	1.20	0.32	0.09	タ	
S D 213	タ	0.48	0.16	0.05	タ	

## 小穴(S P)

## S P 201～S P 208

検出位置は、2区東部のVII-7-7C地区から3区北東部のVII-7-8D地区に集中しており、この部分については、N R 201埋没後の河川跡上面にある。上面の形状では、円形、楕円形、不定形がある。遺物は出土していない。法量等の詳細は第5表に示した。

第5表 2・3区 第2面小穴法量表(単位m)

遺構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 201	VII-7-7C	不明	0.46	0.24	0.15	10YR5/1褐灰色砂質シルト	
S P 202	タ	円形	0.17	0.16	0.03	タ	
S P 203	タ	タ	0.20	0.16	0.03	タ	
S P 204	タ	タ	0.27	0.20	0.05	タ	
S P 205	タ	楕円形	0.50	0.21	0.03	タ	
S P 206	タ	不定形	0.47	0.17	0.08	タ	
S P 207	タ	円形	0.17	0.14	0.03	タ	
S P 208	VII-7-8D	タ	0.25	0.25	0.14	タ	

## 自然河川(N R)

## N R 201(第22図、図版二三)

2区中西部のVII-6-6I地区の東端から以東で検出した。南北方向に流路を持つ大規模な自然河川で、西肩が第3面で検出したN R 301、堰301を切っている。東端は3区に至るもので、2区、3区を区画するY=-37.870.000付近を本河川の東肩とすれば、幅約43m、深さ4m以上の規模が想定される。埋土は極細粒砂～中粒を主体としており、その堆積状況から流路位置が西か



第22図 N R 201出土遺物実測図

ら東に移動しつつ埋没したことが推定される。出土遺物は弥生時代前期～古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される土器・木器類が少量出土している。5点(21～25)を図化した。内訳は弥生土器2点(21・23)、土師器3点(22・24・25)である。25以外はローリングを受けている。21は有段口縁の広口壺である。復元口径22.8cmを測る。口縁部外面に櫛描簾状文と刺突文が施文されている。生駒西麓産である。寺沢薰・森井貞雄氏編年(寺沢・森井1989)の河内IV-4様式に比定される。22は直口壺の口頭部片である。口頭部は完存しており、口径12.5cm、口頭部高7.7cmを測る。色調は淡褐色。胎土中に0.5～3mmの長石・花崗岩・赤色酸化土粒が多く含まれている。非生駒西麓産である。古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。23は弥生土器甕の底部である。裏面は上げ底である。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。弥生時代中期に比定される。24は有稜高杯の杯部片である。復元口径23.0cmを測る。杯部口縁部は斜上方に直線的に伸びるもので、端部付近で強く外反して終わる。杯部内面に放射状にヘラミガキが施されている。色調は黄褐色。胎土は精良。古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。25は布留式甕である。口縁部の約1/2が残存している。口径13.0cmを測る。口縁端部の内部肥厚は内傾し幅広の面を作る。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部内面上位が指頭圧痕、以下左から右方向にヘラケズリを施す。胎土は精良。非生駒西麓産。布留式甕の中では、口縁部の立ち上がりの角度や肥厚部分の形状から見て最終段階の様相を示すもので古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。出土遺物では、古墳時代前期後半(布留式新相)のものが最も新しが、近接する調査成果を総合すれば、河川廢絶時期は古墳時代中期中葉が推定される。なお、北壁面でN R 201埋没後に発生した地震痕跡を2箇所で検出した。地震発生時における液状化現象に伴う噴砂痕で、上下に近接している。検出地点はN R 201東部のY=-37.874.000付近のT.P.+6.6～5.9mで、河川内に堆積する粘土の薄層を切って噴き上がっている。噴き上がりの規模は、幅10cm、高さ60cm程度の小規模なもので、上部は途中で途切れしており、地震発生時においては地表面に達していないものと推定される。噴砂の下部においては、地層葉理の変形構造が認められた。河川の最終埋没時期が古墳時代前期後半(布留式新相)に想定されるため、地震発生時期はこれ以降が推定される。久宝寺遺跡内では、南に近接する第24次調査(KH98-24)で天武十三年(684)の白鳳の南海地震と対応される大規模な地震痕跡が検出されており、それらとの関係が想定される。



写真1 N R 201北壁検出の地震痕跡

### 第3面(第6・7図、図版八~一一)

2・3区で検出した。第6層上面および第7~2層中(T.P.+7.0~6.9m)を構築面としている。検出遺構には、堰1基(堰301)、護岸施設1基(護岸施設301)、自然河川1条(NR301)がある。時期的には古墳時代中期中葉~後半が考えられる。

#### 堰(堰)

##### 堰301(第23図、図版八・九)

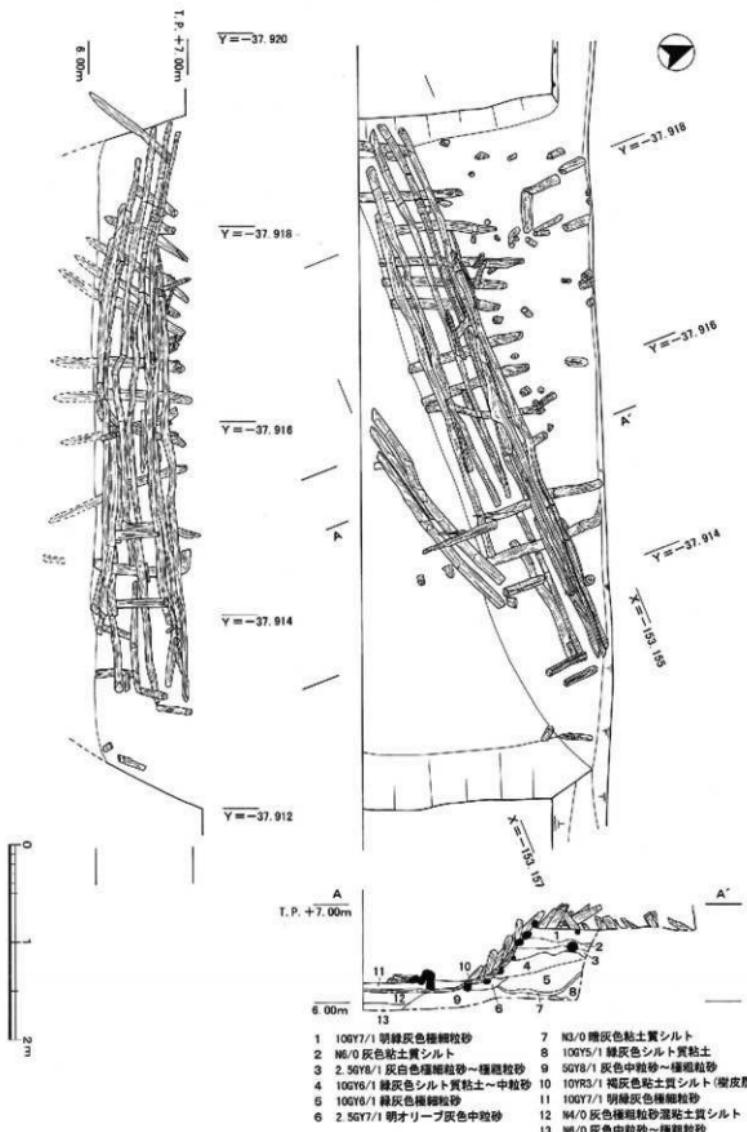
2区西部のⅧ-6-6Ⅰ地区で検出した。南から北への流路を持つNR301に設けられた堰で、東端がNR201に切られている他、北側が調査区外に至るため全容は不明である。堰301はNR301の流路に直交せず東端がやや北に振る形で構築されており、検出部分で東西長6.2m、高さ0.87mを測る。堰の構造は、立杭を下流側に15°~40°傾けて打設した後、横木を設置し、更にこの上面を樹皮で覆う前方部と前方部の立杭に対して「ハ」の字形に立杭を打設する後方部から成る。前方面・後方部の立杭および前方部の横木に使用された丸木材は樹皮が付いたクヌギ材が大半で、立杭の先端を尖らす以外の加工は行われていない。前方部の立杭に使用された丸木材は、径0.1m前後、長さ0.9~1.4mで11本が確認でき、最上部でT.P.+7.09m、最下部でT.P.+5.55mを測る。横木は径0.05~0.08m、長さ2.5~4.5mを測る丸木材を使用して、T.P.+6.05~6.8mの約0.7mにわたって4~7段設置されている。後方部の立杭については、前方部の立杭より径の小さい丸木材が使用されており、検出部分で約30本を確認した。堰の前方部と後方部間に堆積する地層はシルト~粗粒砂を主体とする自然堆積であるため堰の構築に際しては、前方部になる部分を大きく削平した後に構築されたことが推定される。前方部より上流側に堆積する地層は最下層の樹皮層の上面に明緑灰色極細粒砂が堆積し、それより上部には灰白色細粒砂~極粗粒砂が上部まで厚く堆積している。なお、堰の東部の前方部側には中段位置から上流側に張り出して打たれた3本の杭が認められ、この部分に東部へ分流させるための何らかの施設が設けられていたようである。

遺物の出土は堰部分およびNR301においても皆無であり、堰の構築時期を明確にし難いが、位置や規模から勘案して、南約70m地点で実施した第24次調査の2調査区で検出したSD31014との関係が推定されるため、構築時期としては古墳時代中期中葉~後半が推定される。

#### 護岸施設(護岸施設)

##### 護岸施設301(第24・25図、図版一〇・一一・二三)

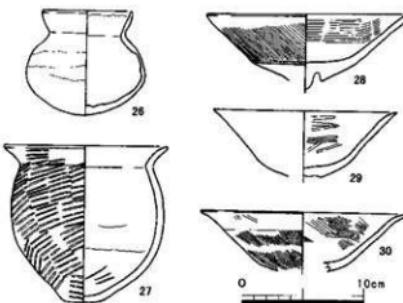
3区北部のⅧ-7-8D地区で検出した。NR201の東岸に設置された護岸施設である。東部で、護岸施設から離れた部材や漂着した部材の堆積が認められ、これらを除けば、検出部分で東西幅約7.2m、南北幅約4.8mを測る。なお、南接する地点で実施した第43次調査(KH2002-43)、第57次調査(KH2004-57)においては本護岸施設から南部に続く部分が検出されており、その部分を含めて南北長は18m以上の規模が想定される。護岸施設の構造は、基本的には流路側である西側から東側に向かって、25°~95°の角度に斜めに打設された立杭とそれに直交ないしは並行に設置された横木で構成されている。立杭の水平面に対する設置角度は、流路側である西側で25°~45°、中位部分で55°~80°、東部で38°~95°である。立杭に使用された丸木材は径0.05~



第23図 墓301平面図

0.2m、長さ0.4~1.55mで約150本以上を確認した。立杭の構築レベルは最上部でT.P.+6.95m前後ではほぼ平均している。横木に使用された丸木材は径0.15~0.2m、長さ0.6~2.7mを測るもので、検出部分で25本以上を確認した。立杭および横木に使用された丸木部材は、樹皮が付いたままのクヌギ材が大半で、立杭の先端を尖らす以外の加工は行われていない。護岸施設が設置されていた部分の地層は、シルト~粗粒砂を主体とする堆積状況が認められており、構築に際して新たな盛土等は行われていない。なお、南に隣接する第43次調査地区内で検出した護岸施設部分では、流路側の傾斜面に敷き詰められた植物層の存在が2面に亘って検出されている。

遺物は護岸施設の東側に堆積する極細粒砂~極粗粒砂(7~1層)から弥生時代前期~古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される土器類が少量出土している。出土遺物は5点(26~30)を図化した。5点ともに土器師である。流出遺物のため器面の消耗が著しい。26は体部最大径が口徑を凌駕する小形壺で完形品である。扁球形の体部に内湾気味に上外方に短く伸びる口縁部が付く。口径7.3cm、器高8.6cm、体部最大径9.8cmを測る。器面は外面がローリングを受けている他、色調についても器面全体に酸化鉄による皮膜が認められ淡赤褐色に変色している。古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。27はV様式系甕である。全体の1/2が残存している。球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く。底部は突出しない平底である。小形に分類されるもので、口径13.4cm、器高13.0cm、底径2.6cmを測る。体部のタキ調整は二分割成形に沿って右上がりに施されている。色調は褐灰色。生駒西麓産である。底部形状からみて古墳時代初頭前半(庄内式古相)のものと推定される。28~30は高杯の杯部である。28が杯部完存、29・30は杯部の1/4が残存している。杯体部に明瞭な稜を有し斜上方に伸びる28と稜を持たない29・30がある。色調は淡黄橙色である。胎土中に共に1mm以下の長石粒を少量含む。形式的には29・30に比して28が古く、28は原田編年(原田1993)の布留式中相の布留Ⅲ期、29・30は布留式新相の布留Ⅳ期に比定される。これらの出土遺物については、護岸施設301の構築以前に堆積した自然河川に関わるものと推定される。護岸施設301の構築時期としては、既往調査の調査成果を勘案して古墳時代中期中葉~後半が推定される。



第24図 護岸施設301出土遺物実測図

#### 自然河川 (N R)

##### N R 301

2区西部のⅦ-6-6Ⅰ地区で検出した。北北東~南南西に伸びるもので、壠301が構築されている他、東端はN R 201に切られている。検出部分で東西幅7m、南北長2.6m、深さ1.3mを測る。遺物は出土していない。南約70m地点で実施した第24次調査の2調査区で検出したS D31014との有機的な関係が推定されるため、遺構帰属時期は古墳時代中期中葉~後半が推定される。



第25図 護岸施設301平面面図

#### 第4面(第6・8・9図、図版一二~一五)

1・3~6区で検出した。第15層上面(T.P.+5.4~5.2m)を構築面としている。検出遺構には、溝12条(S D 401~S D 412)、自然河川1条(N R 401)がある。時期的には古墳時代初頭後半(庄内式新相)~前期後半(布留式新相)が考えられる。

#### 溝 (S D)

##### S D 401

1区のVII-6-5・6G地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、西・南部は調査以外に至り、東部は擾乱を受ける。検出長5.45m、幅1.45m、深さ0.25mを測る。埋土は細粒砂のブロックを含む10Y2/1黒色極細粒砂少量混粘土質シルトで、炭酸鉄を少量含む。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)の土師器、用途不明木製品が出土している。

##### S D 402

3区の北部のVII-7-8D地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長1.9m、幅1.5m、深さ0.2mを測る。埋土はN8/0灰白色中粒砂~粗粒砂の單一層である。遺物は古式土師器(庄内式壺)の小破片が少量出土している。

##### S D 403

S D 402の東で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長2.7m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土はN8/0灰白色中粒砂~粗粒砂の單一層である。遺物は出土していない。

##### S D 404

S D 403の東で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長3.2m、幅0.7m、深さ0.05mを測る。埋土はN8/0灰白色中粒砂~粗粒砂の單一層である。遺物は出土していない。

##### S D 405

S D 404の東で検出した。北東~南西方向に伸びるもので、検出長5.4m、幅1.1m、深さ0.05mを測る。埋土はN8/0灰白色中粒砂~粗粒砂の單一層である。遺物は出土していない。

##### S D 406

3区南部から4区にかけて南北方向に伸びる。検出長24.0m、幅1.8m、深さ0.1~0.2mを測る。埋土はN8/0灰白色中粒砂~粗粒砂の單一層である。遺物は弥生土器、古式土師器の小破片が少量出土している。

##### S D 407

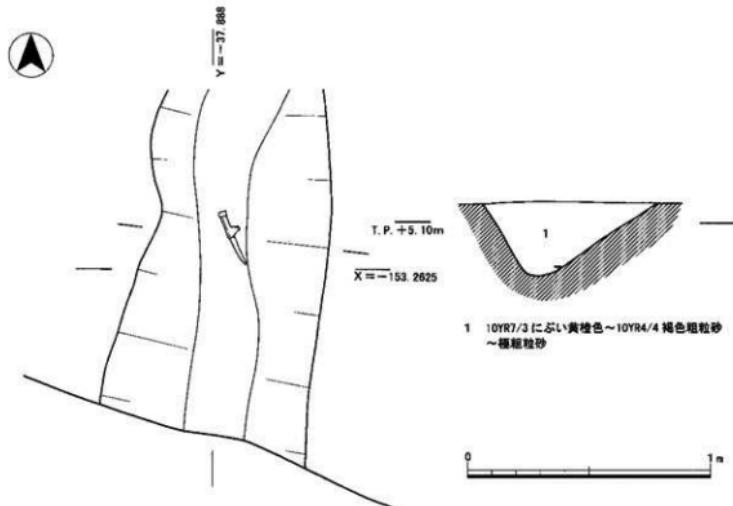
4区南部のVII-12-4・5B、5C地区で検出した。他の溝とは方向が異なり、南東~北西方向に伸びる。検出長2.0m、幅1.0m、深さは0.05mを測る。埋土は10YR7/3にぶい黄橙色~10YR4/4褐色粗粒砂~極粗粒砂である。

##### S D 408

5区南西部のVII-12-6・7A地区で検出した。ほぼ南北方向に伸びる。検出長3.4m、幅0.4m、深さ0.06mを測る。埋土は10YR7/3にぶい黄橙色~10YR4/4褐色粗粒砂~極粗粒砂である。

##### S D 409

5区西部のVII-12-6・7AB地区で検出した。S D 408に並行して南北方向に伸びる。検出長9.0m、幅2.0m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR7/3にぶい黄橙色~10YR4/4褐色粗粒砂~極粗粒



第26図 S D 410鉄剣出土地点平断面図

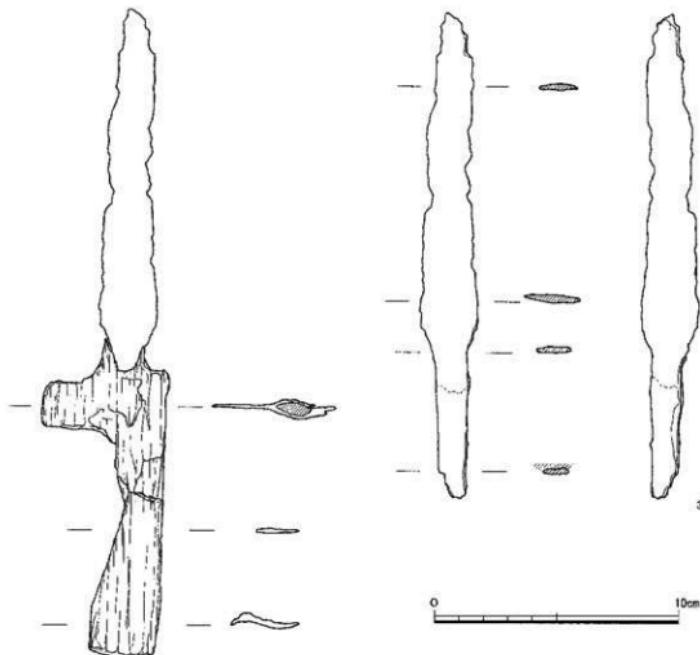
砂である。

#### S D 410(第26・27図、図版一五・二四)

5区中火部のⅧ-12-6・7B地区で検出した。S D 409と並行して南北方向に伸びる。検出長12.0m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。埋土は10YR7/3にぶい黄橙色～10YR4/4褐色粗粒砂～極粗粒砂である。この遺構の最下部近くからは、切先を南に向けた状況で鉄剣が1点(31)出土している。鉄剣は木製の柄が装着された状態で出土した。全体に瘦せており遺存状態は悪い。剣身の断面形状は菱形の両刃で、茎部はやや長い。剣身の鏽は明確でなく、切先を欠いている。目釘孔は確認出来ない。柄部は、柄縁の片方が張り出す形態(柄縁突起)を示す他、柄間の中央部がやや幅狭である特徴を示すが、柄木の遺存状態が悪く詳細については不明な点が多い。法量は、全長26.8cm、剣身長19.9cm、剣身幅2.2cm、茎部長7.0cm、茎部最大幅1.3cm。柄長13.2cm、柄頭幅2.8cm、柄縁幅5.1cmを測る。柄縁突起を持つ木製柄としては、奈良県布留遺跡出土例(5世紀後半)の鹿角形を真似たものがあり、縄文時代中期～弥生時代中期まで存続した「短劍状鹿角製品」に系譜を持つものと推定されている。この形状の柄としては、大前篤子氏分類(大前2001)のI類に分類されるもので、4世紀末が最古例とされている。本例は供伴した土器類が無く帰属時期は限定できないが、層位との関係から古墳時代初頭後半(庄内式新相)～古墳時代前期後半(布留式新相)の範疇が推定される。

#### S D 411

5区北部から6区にかけて南北方向にS D 412と並行して伸びるもので、5区の東部でS D 412に合流している。検出長10.0m、幅1.5m、深さ17.0mを測る。埋土は10YR7/3にぶい黄橙色～10YR4/4褐色粗粒砂～極粗粒砂である。遺物は古墳時代初頭～前期に比定される古式土師器の小



第27図 S D410出土鉄剣実測図

片が極少量出土している。

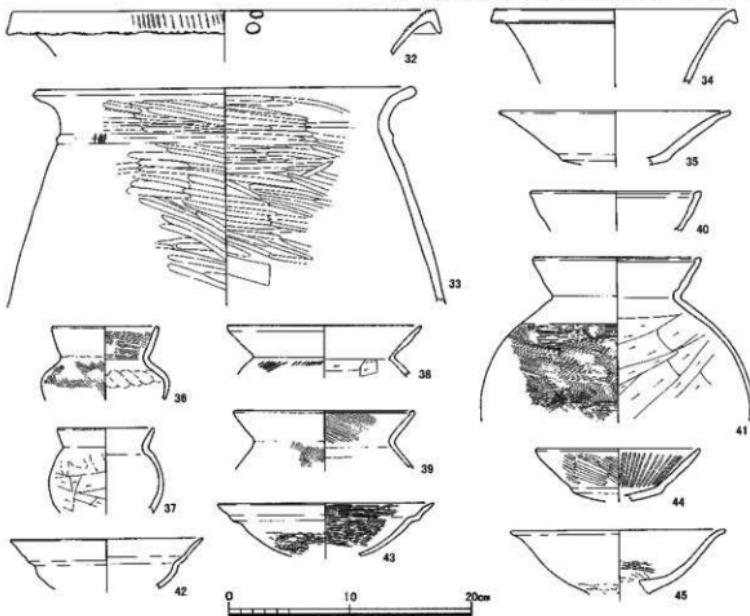
#### S D412

S D411の東側に並行して伸びるもので、5区の東部でS D411に合流している。検出長14.5m、幅1.8~2.5m、深さ0.17mを測る。埋土は10YR7/3にぶい黄橙色~10YR4/4褐色粗粒砂~板粗粒砂である。遺物は出土していない。

#### 河川 (N R)

##### N R401(第28図、図版一三・二四)

4区南部のⅧ-12-2~4C地区で検出した。東西方向からやや北西に振る方向に流路をもつ。検出長3.0m、幅19.0m、深さ1.6mを測る。南の肩はベースを抉って急角度で落ち込み、人頭大の粘土ブロックが多数見られることから、水流の激しいことが窺え、当地が東から北へのカーブ地点にあたる可能性もある。一方、北側の肩はなだらかに落ちている。埋土は板細粒砂~中疊から成る。遺物は弥生時代前期~古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される土器類が少量出土している。14点(32~45)を図化したが、いずれも細片でローリングを受けたものが大半を占めた。32~35が弥生土器、36~45は古式土師器である。32~34は壺である。32は口縁端部が下外方に長



第28図 NR 401出土遺物実測図

く垂下する広口壺である。口縁端部は波状で、端面に築状文が施されている。中期後半に比定される。生駒西麓産。33は前期の大形壺で復元口径30.7cmを測る。体部最上位に1条の突帯が廻る。生駒西麓産。34は口縁端部が下方に肥厚する広口壺である。復元口径19.7cmを測る。後期前半に比定される。非生駒西麓産。35は有稜高杯の杯部片である。色調は赤褐色である。後期後半に比定される。36・37は小形壺である。共に体部最大径が口径を凌駕するものである。37は底部を欠く。体部外面の器面調整はハケを多用する36と鱗状のヘラケズリを施す37がある。色調は36が淡灰褐色、37が赤褐色である。共に古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。38は河内型庄内式壺。体部外面に細筋の右上がりのタタキが施されている。生駒西麓産。39は布留式壺の属性の一部を持つ布留傾向壺に分類される。40・41は布留式壺である。41の体部外面には横位のハケ、体部内面は右上がりのヘラケズリ。42・43は二段に屈曲する口縁を持つ精製品の小形鉢である。38~43は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。44・45は高杯である。44は小形の有稜高杯、45は後を有さず丸味を持つ。44が古墳時代前期前半(布留式古相)、45が古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。出土遺物からみて、河川埋没時期は古墳時代前期後半(布留式新相)が推定される。

### 第5面(第6・8・9図、図版一六・一七)

3・4・6区では、第17層上面(T.P.+5.0~4.9m)を構築面とする土坑4基(S K 501~S K 504)、溝9条(S D 501~S D 509)を検出した。7区では第18層(T.P.+5.1m)を構築面とする自然河川1条(N R 501)を検出した。時期は古墳時代初頭頃が考えられる。

#### 土坑 (S K)

##### S K 501

4区南部のⅧ-12-4C地区で検出した。北に向かって落ち込む造構の南肩を確認した。東壁面では幅0.85m、深さ0.15mが確認できた。埋土は7.5Y2/2オリーブ黒色極細粒砂~中粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

##### S K 502

4区南部のⅧ-12-4・5B C地区で検出した。東西とも調査区外に至る。検出部分で、南北幅3.1m、深さ0.3mを測る。埋土は10GY3/1暗緑灰色細粒砂~極粗粒砂混シルト質粘土と7.5Y4/2灰オリーブ色シルトの2層である。遺物は出土していない。

##### S K 503

4区南部のⅧ-12-5B地区で検出した。円形で径0.35m、深さ0.1mを測る。埋土は10Y2/1黒色極細粒砂を極少量含む粘土質シルト(10Y5/2オリーブ灰色粘土質シルトブロックを含む)の單一層である。遺物は出土していない。

##### S K 504

4区南端のⅧ-12-5B地区で検出した。円形で径0.2m、深さ0.13mを測る。埋土は10Y2/1オリーブ黒色粘土質シルト(10Y4/1灰色粘土質シルトブロックを少量含む)の單一層である。遺物は出土していない。

#### 溝 (S D)

##### S D 501

3区北部のⅧ-7-9D地区で検出した。南東~北西に伸びるもので、検出長2.5m、幅0.75~1.0m、深さ0.15mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粘土である。遺物は出土していない。

##### S D 502

3区北部のⅧ-7-9D地区で検出した。ほぼ東西方向に伸びるもので、検出長2.0m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粘土である。遺物は出土していない。

##### S D 503

3区北部のⅧ-7-10D地区で検出した。南東~北西に伸びるもので、検出長2.5m、幅0.25~0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粘土である。遺物は出土していない。

##### S D 504

3区北部のⅧ-7-10D地区で検出した。S D 503から南へ0.8mの間隔を持ち並行して伸びる。検出長2.5m、幅0.25~0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粘土である。遺物は出土していない。

**S D 505**

4区北部のⅧ-12-1 D～2 C D地区で検出した。南北からやや東に振って伸びる。西肩は調査区外に至る他、S D 506～S D 508、N R 401に切られている。検出長13.5m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粘土である。遺物は出土していない。

**S D 506**

4区北部のⅧ-12-1・2 D地区で検出した。南東一北西に伸びる。検出長2.5m、幅0.65～0.9m、深さ0.2mを測る。S D 505を切る。埋土は植物遺体を多量に含む5G5/1緑灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

**S D 507**

4区北部のⅧ-12-1・2 D地区で検出した。S D 505を切る。S D 506の南に約1.5mの間隔を持ち並行して伸びる。検出長3.0m、幅0.4～0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は5G5/1緑灰色粘土質シルトと植物遺体の互層である。遺物は出土していない。

**S D 508**

4区北部のⅧ-12-2 C D地区で検出した。S D 505を切る。東西方向に伸びる。検出長2.5m、幅0.6～0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は植物遺体を含む5G5/1緑灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

**S D 509**

6区北東部で検出した。南北方向に伸びるもので、検出部分で長さ2.5m、幅0.8m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。

**自然河川 (N R)****N R 501**

7区北西部のⅦ-6-6・7 G H地区で検出した。南東一北西に伸びる。確認できたのは北肩だけであるため、幅等は不明である。検出部分で、長さ2.3m、幅1.0m、深さ1.1mを測る。埋土はシルト質粘土～シルトの4層に分層される。構築層である第19層は層厚約1.5mを測る流水堆積層であり、N R 501はこれらの最終段階の流路部分に相当するものと考えられる。遺物は出土していない。

**第6面(第8・10図、図版一八)**

3・6区で検出した。第20層上面(T.P.+5.0～4.9m)を構築面としている。検出遺構には、溝3条(S D 601～S D 603)、堤状遺構1基(堤状遺構601)がある。時期は弥生時代後期～古墳時代初頭が考えられる。

**溝 (S D)****S D 601**

3区南部のⅧ-7-10 D地区で検出した。南東一北西に伸びるもので、検出長2.5m、幅0.25～0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色極細粒砂混粘土質シルトで、遺物は出土していない。

### S D 602・603

6区中央で検出した。堤状遺構601の両側に付随する溝である。S D 602は堤状遺構601の北側にあり、検出長4.0m、幅0.3~0.5m、深さ0.08mを測る。S D 603は堤状遺構601の南側にあり、検出長4.0m、幅0.2~0.5m、深さ0.04mを測る。堤状遺構601はS D 602・S D 603を掘り込むことで形成されており、水田耕作に伴う取排水の溝としての機能があったと考えられる。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト～シルトである。遺物は出土していない。

### 堤状遺構（堤状遺構）

#### 堤状遺構601

6区中央ではほぼ南北方向に伸び、途中で北西方向に曲がり蛇行する堤状遺構である。規模は検出長約4.0m、幅0.1~0.5m、高さ0.08mを測る。堤状遺構を構成する地層が構築面と同じ5BG4/1暗青灰色粘土質シルトであるため、削り出しにより構築されたものと考えられる。

### 第7面(第6・10図、図版一九)

2・5・6区で検出した。第23層上面(T.P.+4.6~4.4m)を構築面としている。検出遺構には、自然河川2条(N R 701・N R 702)がある。時期は弥生時代中期前半が考えられる。

### 自然河川（N R）

#### N R 701

2区西部のⅧ-6-6H・I地区で検出した。検出部分で、東肩が南北方向、西肩が南東-北西方向に伸びるもので、検出長2.3m、幅18.3m、深さ0.21mを測る。埋土は2層からなり上部が植物遺体を含む10YR4/1褐色シルト、下部が2.5GY8/1灰白色細粒砂～極粗粒砂である。遺物は出土していない。

#### N R 702

5区の中央付近から6区の全域で検出した。南東-北西方向に伸びる自然河川である。南肩は調査区外に広がる。平面図は東壁断面から推定されるラインを示している。検出部分で長さ12.5m、幅5.0m、深さ0.54mを測る。埋土は5Y6/2灰オーリープ色極細粒砂～極粗粒砂。遺物は弥生時代前期後半～中期前半の土器とサヌカイト片が出土している。

### 第8面(第10図、図版一九・二〇)

6区で検出した。第24層上面(T.P.+4.0~3.9m)を構築面としている。検出遺構には、溝1条(S D 801)がある。時期は層位の前後関係から縄文時代晚期～弥生時代前期前半頃と考えられる。

### 溝（S D）

#### S D 801

6区の南部で検出した。ほぼ東西方向に伸びるもので、検出部分で検出長3.5m、幅1.0m、深さ0.12mを測る。埋土は植物遺体がラミナ状に入る10Y5/1灰色細～粗粒砂である。溝の底には偶蹄類のものと思われる足跡が無数に確認できる。遺物は出土していない。

## 第9面(第10図、図版二〇・二一)

5・6区で検出した。第29層上面(T.P.+3.5~3.6m)を構築面としている。検出遺構には、溝3条(S D 901~S D 903)、落ち込み1箇所(S O 901)がある。時期は層位の前後関係から縄文時代後期以前と考えられる。

## 溝(S D)

## S D 901

5区北東部のⅧ-12-6B地区で検出した。南東から東に大きくカーブしながら北東に伸びる溝である。検出部分で長さ5.0m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土(下部にシルト~極細粒砂をラミナ状に含む)の単一層である。遺物は出土していない。

## S D 902

5区中央部のⅧ-12-7A、6・7B地区で検出した。北東方向に伸びた後、ゆるやかにカーブを描いて東に伸びる溝である。検出部分で長さ14.0m、幅0.85~1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土(下部に中粒砂~極粗粒砂をラミナ状に含む)の単一層である。遺物は出土していない。S D 901、S D 902は共に第10面で検出したN R 1001の上部にあたることから、N R 1001の最終段階の流路部分である可能性が高い。

## S D 903

6区北部のⅧ-12-6・7B地区で検出した。南東~北西方向に伸びる。検出部分で長さ4.5m、幅1.5m、深さ0.5mを測る。埋土は3層で上層からN4/0灰色細粒砂質粘土質シルト、N3/0暗灰色極細粒砂混粘土質シルト、10Y4/1灰色シルト混極細粒砂~粗粒砂である。遺物は出土していない。第10面で検出したN R 1002の最終段階の流路部分である可能性が高い。

## 落ち込み(S O)

## S O 901

5区南西部のⅧ-12-7B地区で検出した。西部および南部は調査区外に至る。検出部分で長さ3.5m、幅1.5m、深さ0.2mを測る。埋土は2層で上層が5G2/1緑黒色シルト~細粒砂、下層が7.5GY3/1暗緑灰色シルト質細粒砂である。遺物は出土していない。

## 第10面(第11図、図版二二)

5・6区で検出した。第31層上面(T.P.+3.4~3.5m)を構築面としている。検出遺構には、自然河川2条(N R 1001・N R 1002)がある。時期は縄文時代後期以前と考えられる。

## 自然河川(N R)

## N R 1001

5区で検出した自然河川である。西肩は南西から北東に向かって直線的に伸びるが、東肩は南西から北東に伸びた後、大きくカーブして、6区で検出したN R 1002と合流している。検出部分で、長さ15.0m、幅6.3m、深さ0.9~1.1mを測る。川底の標高は、南端と北端では約0.3mの高低差があることから流路方向は南から北が想定される。埋土は植物遺体を多く含む2.5Y5/3灰褐色

～5Y6/1灰色粘土質シルト～極粗粒砂の互層である。

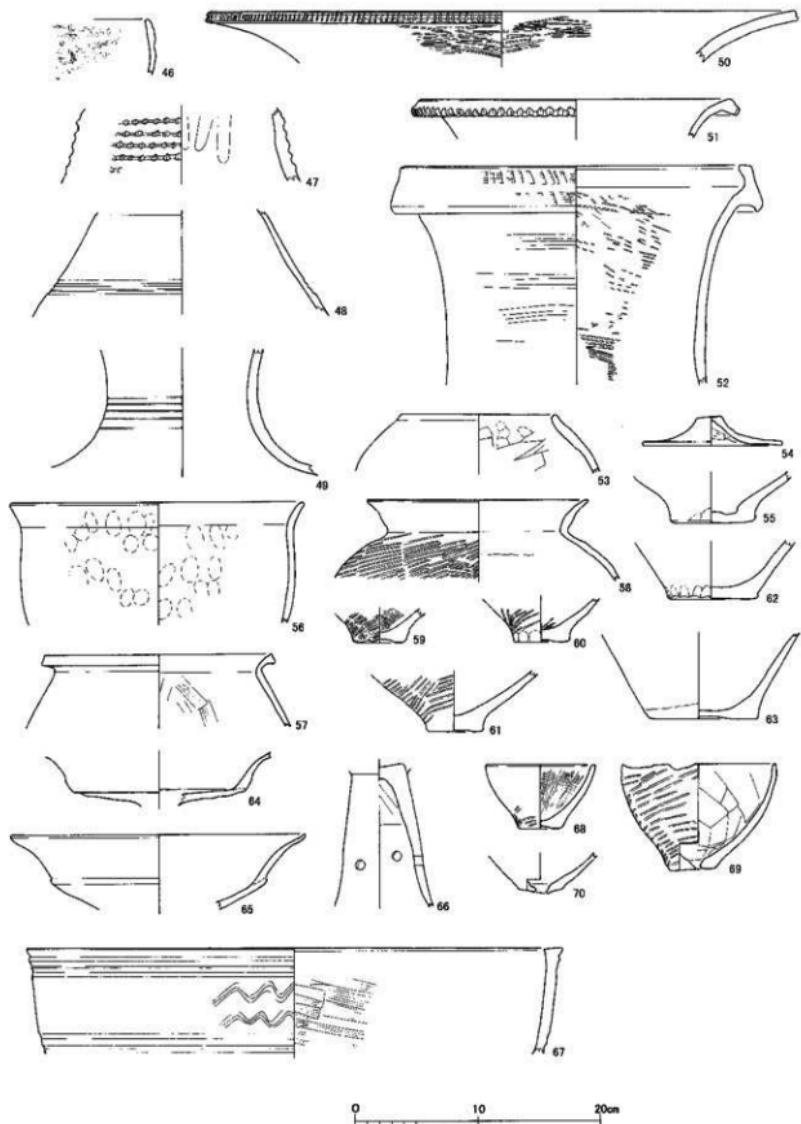
#### N R1002

6区で検出した自然河川である。西肩のみを検出した。南東～北西方向に伸びるもので、北西部は5区で検出したN R1001と合流している。検出部分で長さ5.0m、幅2.5m、深さ0.6mを測る。堆土は5Y4/1灰色シルト～細礫と5Y4/1灰色極粗粒砂混細～中粒砂である。遺物は出土していない。

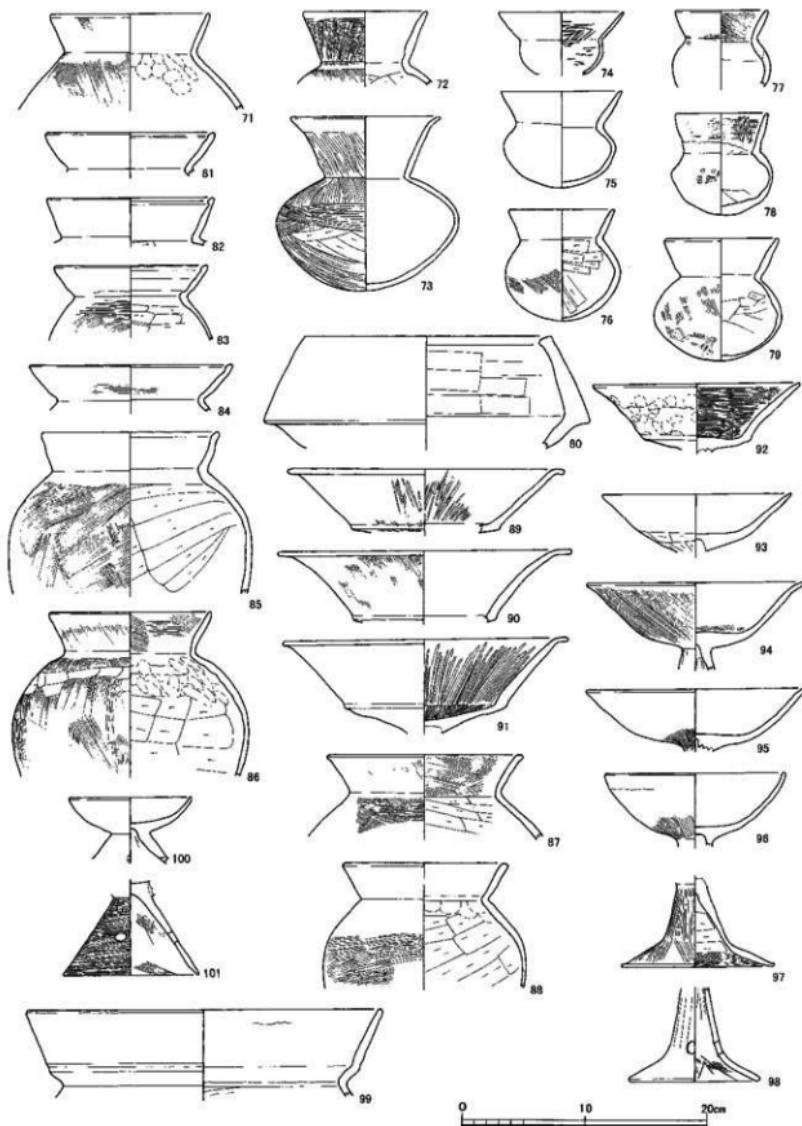
#### 2) 遺構に伴わない遺物

##### 第7層出土遺物(第29～31図、図版二五～二八)

第7層出土遺物は、自然河川内埋土である洪流水砂層から出土したものである。第7層は2～6区に広がりを持つもので、第7-1層～第7-7層に大別したが遺物の取り上げに際しては、地区のみの峻別で層位別に取り上げたものではない。出土遺物には、縄文土器・弥生土器・古式土師器がある。57点(46～102)を図化したが、その大半がローリングを受けた細片が中心で、一部は酸化鉄の影響を受け赤褐色に変色したものが見受けられた。46は縄文土器の細片である。沈線で渦巻き文が表現されている。胎土中に角閃石が含まれている。縄文時代後期中葉に比定される。Ⅶ-12-6B地区出土。47～70は弥生土器である。47～49は広口壺片である。47が貼り付け突窓。48・49は多条沈線が施されている。47が生駒西麓産。他の非生駒西麓産。47～49は弥生時代前期新段階(河内I-4様式)。47・48は5区のⅦ-12-6・7AB地区出土。49は4区のⅦ-12-1D地区出土。50は長頸広口壺で口縁端面に1条の沈線文と縦位の直線文を施す。非生駒西麓産。弥生時代中期前半(河内II-1様式)。5区のⅦ-12-7B地区出土。51は口縁端部が下外方に垂下する広口壺で、口縁端部に刻み目が施されている。生駒西麓産。52は有段口縁を有する長頸の広口壺。器面調整は口縁部外面に簾状文、頸部外面に直線文を施すが、ローリングを受けており不鮮明である。生駒西麓産。51・52共に弥生時代中期中葉(河内III-2様式)。51は5区のⅦ-12-6・7地Ⅳ、52は6区のⅦ-12-7B地区出土。53は無頸壺である。色調は淡赤褐色。非生駒西麓産。弥生時代後期。5区のⅦ-12-6・7AB地区出土。54は中央部に突出したつまみを持つ壺の蓋である。生駒西麓産。弥生時代前期。3区のⅦ-7-8D地区出土。55は壺底部である。非生駒西麓産。弥生時代前期。3区のⅦ-7-9D地区出土。56はいわゆる如意形口縁の形状を有する壺である。非生駒西麓産。弥生時代前期新段階(河内I-4様式)。5区のⅦ-12-6B地区出土。57は河内形壺である。口縁部は「く」の字に外反し、端面は下方に肥厚している。生駒西麓産。弥生時代中期中葉(河内III-1様式)。51のⅦ-12-7B地区出土。58～61は体部外面の器面調整にタタキを多用する壺である。58は「く」の字に屈曲する口縁部を持つもので、復元口径18.0cmを測る。59～61は底部で、底部裏面はドーナツ底である。60が生駒西麓産、他が非生駒西麓産である。弥生時代後期。58が5区のⅦ-12-6・7AB地区、59・61が3区のⅦ-7-8D地区、60が6区のⅦ-12-7B地区出土。62・63は壺の底部である。弥生時代前期および中期が推定される。共に3区からの出土で、地区は62がⅦ-7-9D地区、63がⅦ-7-8D地区である。64～66は高杯である。64・65が杯部、66が脚部である。64・65は共に有稜高杯で形状から64は弥生時代後期前半、65が弥生時代後期後半に比定される。66は大形高杯の脚部で柱状部が残存している。柱状部は中空で、柱状部下位にスカシ孔が6個穿たれている。色調は赤褐色。弥生時代後期前半。65・66が生駒西麓産。64が非生駒西麓産。64・66が3区のⅦ-7-9D地区、

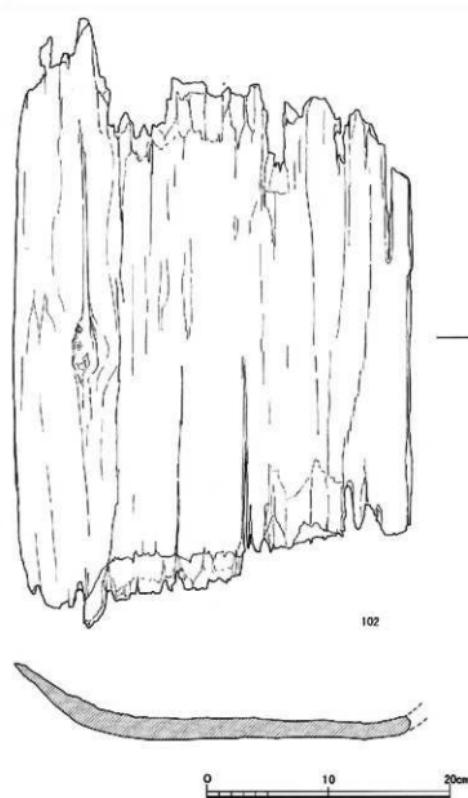


第29図 第7層出土遺物実測図-1



第30図 第7層出土遺物実測図-2

65が4区のⅦ-12-2 C D地区出土。67~70は鉢である。67は大形の鉢で、復元口径43.5cmを測る。口縁端部が外方向に肥厚し幅広の端面を形成している。口縁部上位に3条、下位に2条の凹線文、その間に波状文2条が施されている。生駒西麓産。弥生時代中期後半(河内IV-4様式)。68は小形鉢である。底部は突出しない平底で、裏面はドーナツ底である。69・70は有孔鉢である。69は2/3以上が残存しており、口径12.3cm、器高8.8cm、底径3.8cmを測る。体部外面は右上がりのタタキ調整が施されている。孔は焼成前で梢円形を呈する。70は裏面穿孔部分が外側に向かって小さく隆起している。68~70は生駒西麓産。弥生時代後期後半。67・68が3区のⅦ-7-9 D地区、69が5区のⅦ-12-



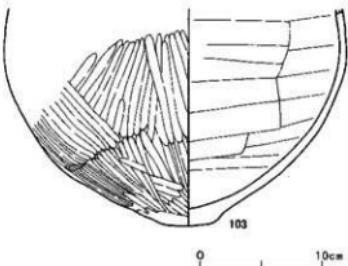
第31図 第7層出土遺物実測図-3

6・7 A B地区、70が4区のⅦ-12-2 C D地区出土。71~101は古式土師器である。71~80は壺である。71は広口壺である。角閃石を多く含む生駒西麓産。古墳時代初頭後半(庄内式新相)のものか。4区のⅦ-12-4 C地区出土。72は精製品の直口壺である。口縁部外面に縦位にヘラミガキが施されている。古墳時代前期前半(布留式古相)。4区のⅦ-12-5 B C地区出土。73は扁球形の体部に直線的に伸びる口頸部が付く直口壺である。外面の器面調整は口縁部から体部上半にかけて縦位のハケ、以下はヘラケズリを行う。色調は橙色。胎土はやや粗く0.1~2mmの大の長石を多く含む。古墳時代前期後半(布留式新相)。6区のⅦ-12-7 B地区出土。74~79は小形丸底壺である。半球形の体部に大きく開く口縁部が付く74、口径が体部径を僅かに凌ぐ75、体部が球形化し、体部最大径が口径を凌駕する76~79がある。74・75が精製品。76~79は粗製である。74が古墳時代前期前半(布留式古相)、75が古墳時代前期中葉(布留式中相)、76~79が古墳時代

前期後半(布留式新相)に比定される。74・77が3区のⅦ-7-8 D地区、75が4区のⅦ-12-5 BC地区、76・78は5区のⅦ-12-7 B地区、79が4区のⅦ-12-3 C地区出土。80は東四国系の大形の複合口縁壺である。胎土中に角閃石を多く含む。古墳時代初頭後半(庄内式新相)。3区のⅦ-7-8 D地区出土。81~85は布留式壺である。古墳時代前期前半~中葉(布留式古相~中相)に比定される。85は布留式壺の最終段階のもので、古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。81が3区のⅦ-7-8 D地区、82・84が5区のⅦ-12-6・7 AB地区、83が4区のⅦ-12-5 BC地区、85は4区のⅦ-12-2 CD地区出土。86~88は口縁部が直口を呈する壺で、布留式壺の最終段階に成立した器種である。体部外面の器面調整には、横位にハケを行う87・88と縦位にハケを行う86がある。古墳時代前期後半(布留式新相)。86が4区のⅦ-12-4 C地区、87が6区のⅦ-12-7 B地区、88が3区のⅦ-7-8 D地区出土。高杯は10点(89~98)を固化した。89~91は大形の有稜高杯の杯部である。口縁部は明瞭な稜部から斜上方に伸びるもので、端部付近で強く外反して終る共通した形態を持つ。古墳時代前期後半(布留式新相)。89が4区のⅦ-12-2 CD地区、90が6区のⅦ-12-7 B地区、91が6区のⅦ-12-7 B地区出土。92・93は共に小形品である。92は杯部外面の器面成形が難で指頭圧痕が残る。古墳時代初頭後半~前期前半(庄内式新相~布留式古相)。93は杯体部外面にヘラケズリを施す。古墳時代前期前半(布留式古相)。94・95は杯部の稜を欠き、屈曲部が丸味を帯びたものである。古墳時代前期中葉~後半(布留式中相~新相)。92・94が5区のⅦ-12-6・7 AB地区、93は4区のⅦ-12-2 C地区、95が6区のⅦ-12-7 B地区出土。96は楕円形の杯部を持つ。古墳時代前期後半(布留式新相)。3区のⅦ-7-8 D地区出土。97・98は脚部である。98には裾部裏面にヘラ状工具による「↑」のヘラ記号が施されている。スカシ孔は3方に穿たれている。5区のⅦ-12-7 AB地区出土。99は形態的には山陰系の大形鉢に分類されるが、本例は角閃石を多く含む生駒西麓産である。6区のⅦ-12-7 B地区出土。100・101は精製品の小形器台である。101の脚部には3方にスカシ孔が穿たれている。古墳時代初頭後半~前期前半(庄内式新相~布留式古相)。100が6区のⅦ-12-7 B地区、101が5区のⅦ-12-6・7地区出土。102は木製品の槽の残片である。残存部分で長さ50cm、幅32cm、厚さ2cmを測る。裏面に方形に削り残され、僅かに突出する部分が1箇所残存している。4区のⅦ-12-2 D地区出土。出土遺物からみて、第7層の形成時期は古墳時代前期後半(布留式新相)の4世紀末~5世紀初頭が考えられる。

#### 第15層出土遺物(第32図、図版二八)

103は4調査区南端のⅦ-12-5 B地区の第4面を検出した第15層中で検出した。球形を呈する壺の体部で中位以下が残存している。残存高18cm、底部径4.5cmを測る。底部は小さく突出する平底である。器面調整は体部外面がやや単位輻の広い密なヘラミガキ、内面は横位に板ナデを行う。体部外面に煤の付着が認められる。生駒西麓産。古墳時代初頭(庄内式期)のものと考えら



第32図 第15層出土遺物実測図

れるが、口縁部を欠くため時期は限定できない。

## 註記

- 註1 原田昌則他 2001「久宝寺遺跡24次発掘調査報告書—大阪帝華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に伴う—」『(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 坪田真一 2005「I 久宝寺遺跡(第43次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会報告
- 註3 桶口 薫 2005「Ⅶ久宝寺遺跡(第57次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会報告
- 註4 置田雅昭 1985「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学報 第145輯』  
一瀬和夫 1996「二 大刀外装の変化」「金の大刀と銀の大刀—古墳・飛鳥の貴人と階層—」大阪府立近つ飛鳥博物館図録9
- 註5 大前篤子 2001「刀剣装具の装飾とその社会的意義—木製・鹿製刀剣装具を中心に—」『滋賀史学会誌第13号・特集号』滋賀史学会

## 参考文献

## 弥生土器・土師器

- ・寺沢 薫・森井貞雄 1989「1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- ・原田昌則 1993「第5章まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式上器の編年試案」『II 久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2003「第5章 遺構・遺物の検討 第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古棺)の土器細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪帝華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う—』(財)八尾市文化財調査研究会報告74 (財)八尾市文化財調査研究会

## 古代～中世の土師器

- ・奈良国立文化財研究所 1987「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所学報第32冊
- ・古代の土器研究会編 1992「古代の土器 I 都城の土器集成」
- ・古代の土器研究会編 1993「古代の土器 II 都城の土器集成」
- ・佐藤 隆 1992「第2節 平安時代における長原遺跡の動向 ii) 長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』(財)大阪市文化財協会
- ・森島康雄 1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会

## 第3章　まとめ

今回の調査は、一部を除けば狭小で線的な調査の連続であったため、平面的な広がりを知るうえでは断片的なものに限定せざるを得なかった。しかし、各調査区ともに掘削深度が深く多面に亘る調査が可能であったため、遺跡内での地形形成の状況や古環境を推定するうえで多くの資料を提供する結果となった。

調査では、縄文時代後期以降の遺構・遺物を検出している。以下、検出した時期毎に概観してみる。

### 縄文時代後期以前

第10面が該当する。5・6区において自然河川2条(N R1001・N R1002)を検出した。6区の南東部から流れるN R1002は、5区の北東部でN R1001と合流し、さらに北に流下している。遺物が出土しておらず、河川の機能時期は明確でないが、周辺の調査事例と層位的な見解から縄文時代後期以前に比定されるものと推定される。

### 縄文時代晚期

5～7区のT.P+3.7～3.9m付近で湿地状の堆積(第24層)および6区でS D801を検出した。第24層には植物遺体(葦)が多く含まれており、この時期、湿原の環境下に当地一帯が包括されていたことが推定される。近接する多目的広場の調査では、晚期最終末(長原式)に成立した集落が検出されている。

### 弥生時代前期

1～7区のT.P+4.0～4.7mの間で洪水砂(第18・19層)と腐植土(植物遺体)が互層に堆積していた。前期を通じて河川氾濫が頻発する不安定な環境であったものと考えられる。西接する地点では、水処理施設、第23次調査の8～13調査区で前期中段階に成立した集落が検出されている。

### 弥生時代中期

当該期の遺構としては、第7面が該当する。2区でN R701、5区から6区でN R702を検出した。中期においても当地付近は自然的な制約を受ける環境下にあったようで、人間活動の痕跡は見受けられなかった。

### 弥生時代後期～古墳時代初頭(庄内式古相)

当該期の遺構としては、第5・6面が該当する。弥生時代後期以降になると中期までの自然的制約から開放され、当地は生産域へと移行している。3・4・6区では生産域を構成する土坑・溝・堤状遺構等が検出されている。

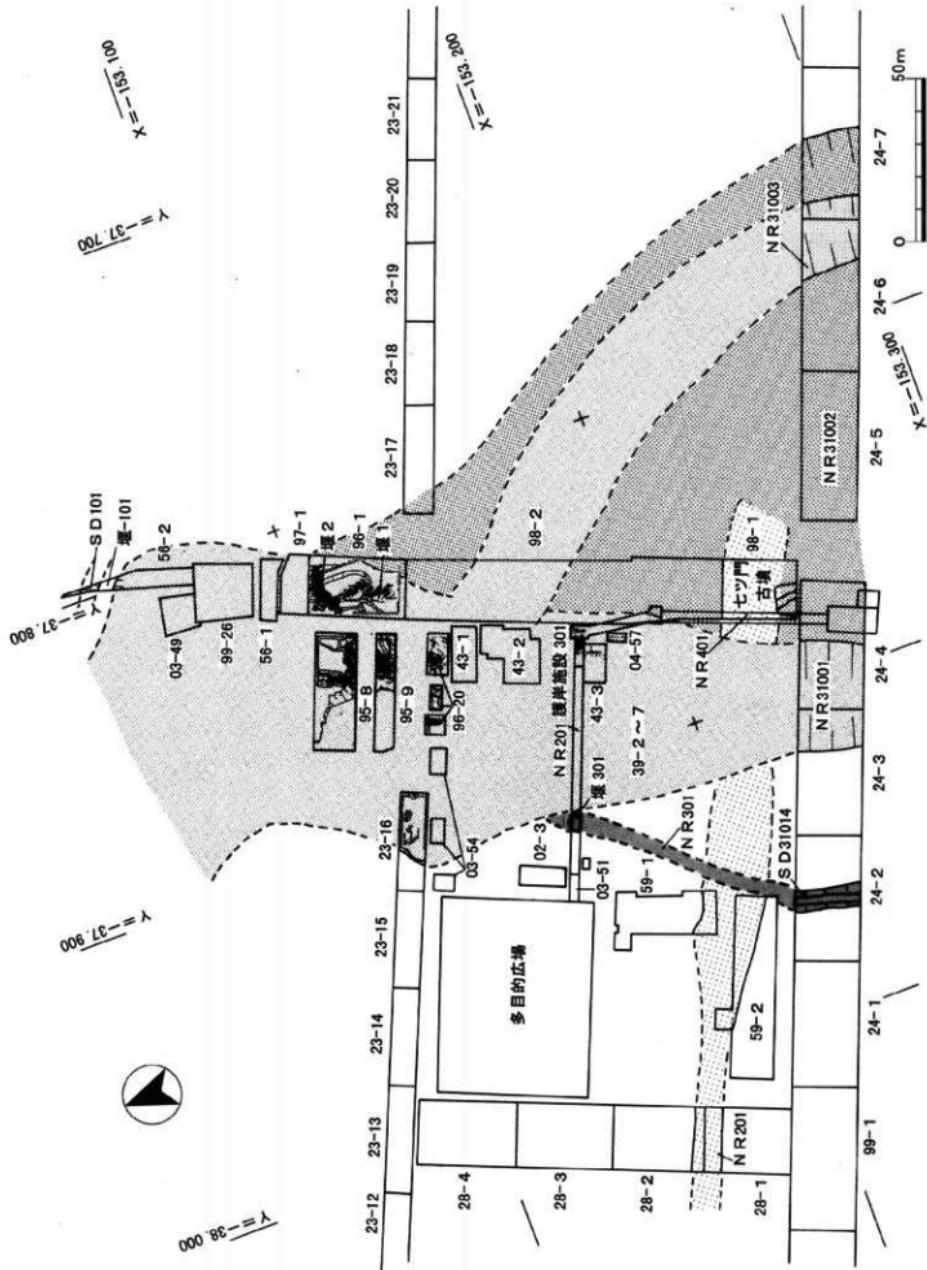
### 古墳時代初頭後半(庄内式新相)～古墳時代前期後半(布留式新相)

当該期の遺構は、第15層上面(T.P+5.4～5.2m)で検出した第4面が該当する。前代に引き続き生産域に関連した遺構が主で、1・3～6区では溝・自然河川が検出されている。4区では東西方向に伸びるN R401が検出されており、西部で行われた第59次調査、第28次調査、水処理施設の調査で検出されている自然河川に対応する。なお、5区で検出したS D410からは木製の柄が装着された状態の鉄剣(31)が出土している。この時期以降、自然河川による洪水砂(7-1～

7-7層)が調査区のほぼ全域にわたって厚く堆積している。

#### 古墳時代中期前半～中葉

当該期の造構は第3面として捉えている。各調査区で自然河川を成因とする洪水砂(7-1~7-7層・10層)の広がりおよび、自然河川に付隨して設けられた堰・護岸施設等を検出した。なお、調査区周辺では大阪府文化財センター(以下府文化財センター)および当調査研究会による発掘調査で自然河川や河川に設けられた堰、堤状造構等が検出されており、それらの調査成果を総合して本調査で検出した造構との関わりを推定してみたい。N R201は南-北東方向に伸びるもので、幅約43m、深さ4m以上を測る大規模な自然河川であり、南部で実施した第24次調査の3・4調査区で検出したN R31001と同河川であると考えられる。N R201は3~7区で確認した洪水砂層である(7-1~7-7層)を切る関係であるため、先行する自然河川の存在が想定される。この河成堆積をもたらした自然河川については、第24次調査の4~7調査区で検出されたN R31002が対応するものと考えられる。N R31002は南北方向に流路を持つもので、幅約140m、深さ2.8mを測る大規模な河川で、古墳時代前期後半(布留式新相)には機能を停止した河川と推定されている。この河川の下流部に当たる府文化財センター調査の95-8・9トレンチでは、堰2を構築する以前の段階に調査区の中央部より西側で河川跡が検出されており、この部分がN R31002の流芯部分であった可能性がある。N R201に付隨する施設としては、府文化財調査センター-95-8・9トレンチ、96-1トレンチの堰2基(堰1・2)、府文化財調査センター-98-2トレンチのIV区の杭列1、III区の杭列2、本調査3区の護岸施設301、第43次調査の堰401、第57次調査の杭列がある。堰1・2については、柄穴を有する二俣木を堰部材に使用した合掌型の堰で、堰2については、その全長が40mを超えるものと推定される。堰2に「T」字状に取り付く堰1については、堰2に比してやや小型のもので、水勢の緩和や土砂流入を防ぐ堰2の補助的な機能を果たしたものと推定される。その他、98-2トレンチのIV区の杭列1、III区の杭列2、本調査3区の護岸施設301、第43次調査の堰401、第57次調査の杭列については、造構名を異にするが基本的には、堰1の南部から河川の流路に対して並行し、南北方向に伸びるものであるため、護岸のために設けられた水制施設であったと考えられる。第20次調査の1~3区で検出された、大量の堰部材については、堰1・堰2の機能を停止する成因となった洪水の際に遊離し、堰より上流部分に堆積したものと推定される。一方、JR久宝寺駅の北方で行った第56次調査の2区では、多量の杭が打設された堤-101(基底幅5.8m、上面幅3.9m、高さ約2.4m)の北側に付隨してS D-101(幅約7m)が検出されており、この護岸堤についてはN R201に関連した可能性が高い。2区で検出した堰301については、第24次調査の2調査区で検出した古墳時代中期中葉に比定されるS D31014の下流に構築されたもので、N R201に東部が破壊されており、一部、遊離した堰部材がN R201内に残存していた。N R201埋没後の状況を示すものとしては、98-2トレンチのIV~V区の西壁で幅33m規模の河川跡が検出されている。この河川はN R201に伴う河川堆積層を切るもので、第24次調査の6・7調査区で検出したN R31003に対応する可能性がある。以上のような、自然河川に対する水制技術の具体的な施工方法は、当該期に増加する韓式系土器に表出されるように朝鮮半島南部を中心とする渡来系集団との関係が留意されるもので、単に久宝寺遺跡のみならず、河内平野内での当該期の集落形成の在り方を考えるうえで示唆的である。



第33図 古墳時代前期(布留式期)～中期の自然河川変遷推定図

### 古墳時代中期末

2区の第2面で検出した。5世紀中葉に埋没した自然河川(NR201)の上面が生活面として利用されている。2区の第2面では居住域を構成する溝・小穴等が検出されている。

### 飛鳥時代～近代

各調査区の1・2面で検出した。一部を除けば大半が耕作に開拓した小溝を中心である。

### <参考文献>

- ・後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市龟井在住 久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・白由通路設置に伴う—」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・本田奈津子 1996「古墳時代の合掌型埴—久宝寺遺跡・竜華地区検出例をもとに—」『大阪文化財研究第10号』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・後藤信義他 1998「八尾市洪川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 薫 1999「8久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)」『平成10年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2000「Ⅲ久宝寺遺跡第20次調査(KH96-20)」(財)八尾市文化財調査研究会66 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・小山田宏一 2001「第二章 古代の土木技術 四、渡来人と治水技術」「開館記念特別展 古代の土木技術」大阪府立狭山池博物館
- ・赤木克祝他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に伴う』(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・岡田清一他 2004「I久宝寺遺跡(第28次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2005「I久宝寺遺跡(第43次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2005「VI久宝寺遺跡(第56次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 2005「VII久宝寺遺跡(第57次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 2005「13.久宝寺遺跡第59次調査(KH2004-59)」『平成16年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・金光正裕他 2005「久宝寺遺跡 発掘調査成果—2001～2004年度のまとめ—」(財)大阪府文化財センター

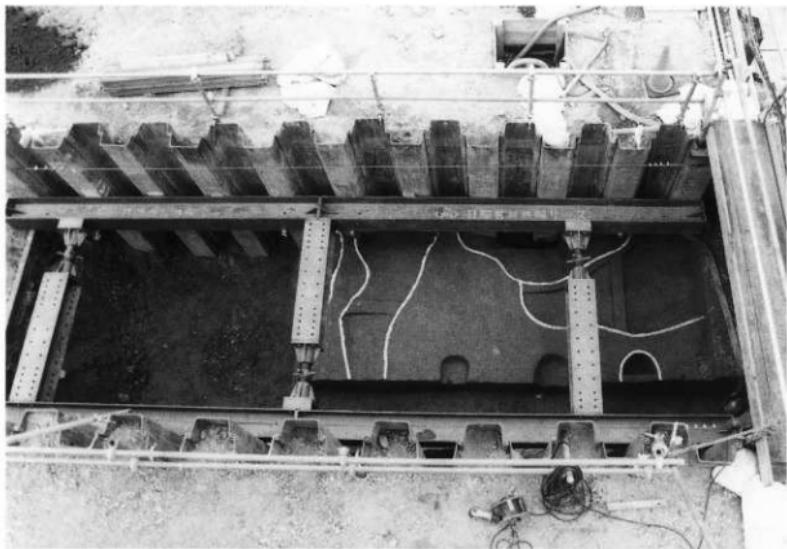




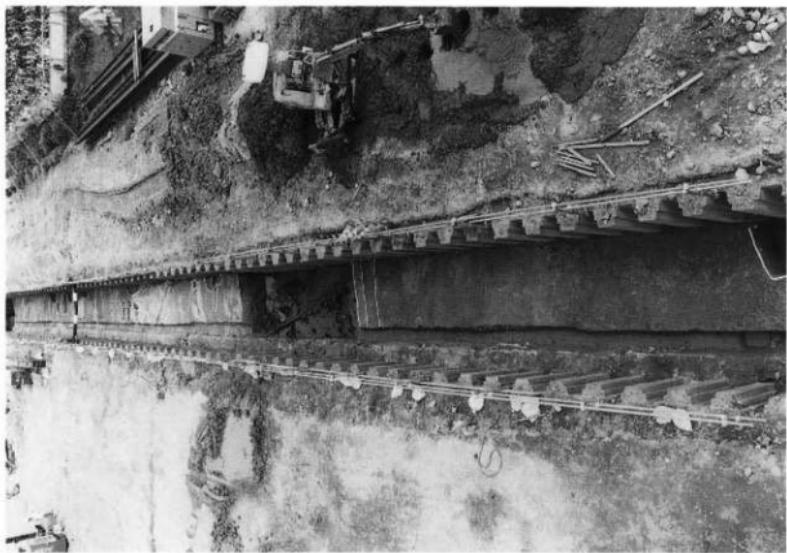
調査前の状況(南から)



調査風景(東から)



1区 全景(北から)



2区 全景(西から)



2区 遺構検出状況(北から)



3区 遺構検出状況(北から)



5区 全景(北西から)



6区 全景(北東から)



1区 SD 201検出状況(北東から)



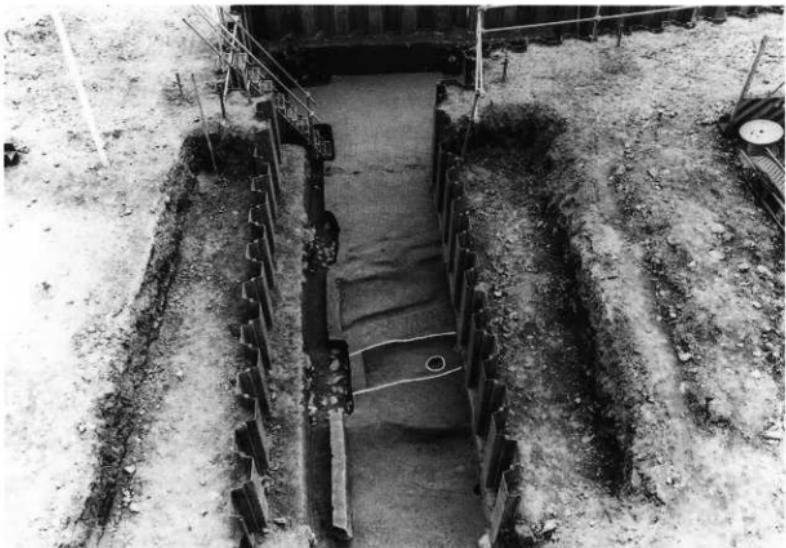
1区 SK 201検出状況(東から)



2区 全景(西から)



2区 SD 204、205検出状況(北から)



3区 SD206・SP208検出状況(西から)



5区 SK202検出状況(東から)



2区 堆301検出状況(東から)



同上 検出状況(西から)



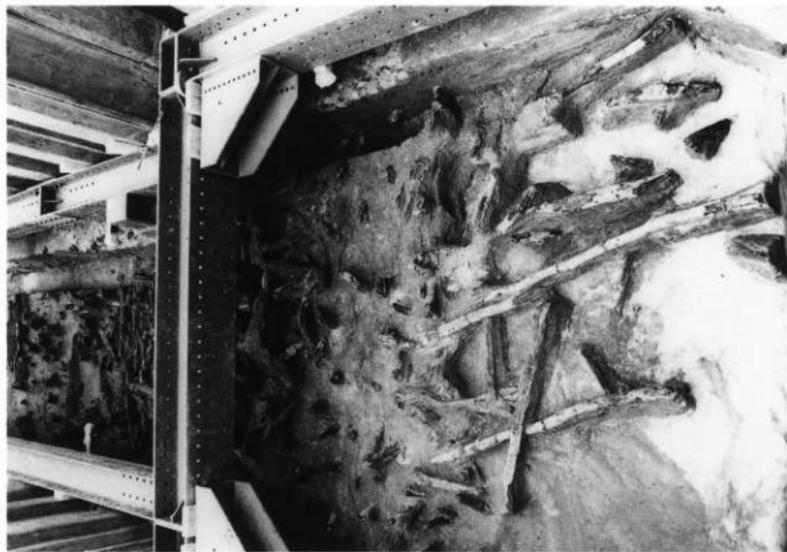
2区 煙301細部(東から)



同上 断ち割り(東から)



3区 護岸施設301検出状況(北から)



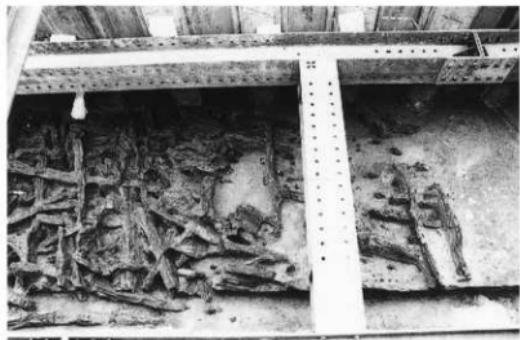
同上 検出状況(東から)



3区 護岸施設301東部(北から)



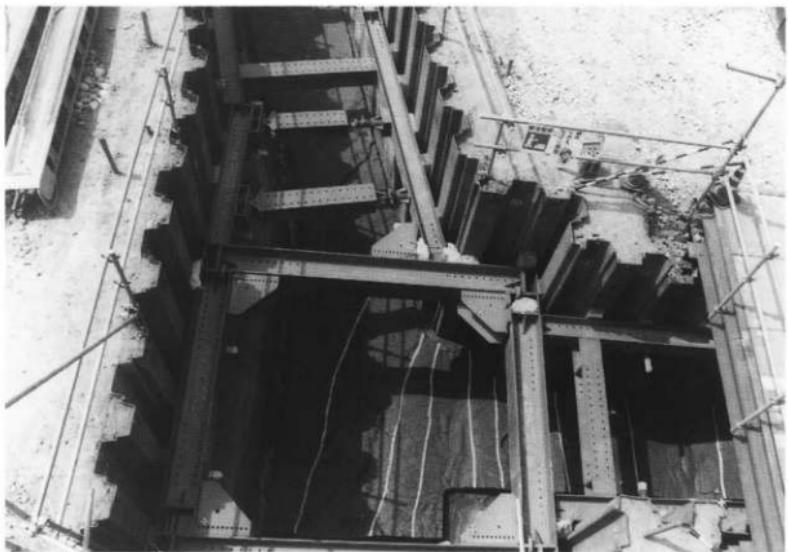
同上 東部(東から)



同上 中央部～西部(北から)



1区 SD401検出状況(東から)



3区 遺構検出状況(北から)



3区 SD406検出状況(南から)



4区 NR401検出状況(北から)



5区 全景(北から)



6区 全景(北から)



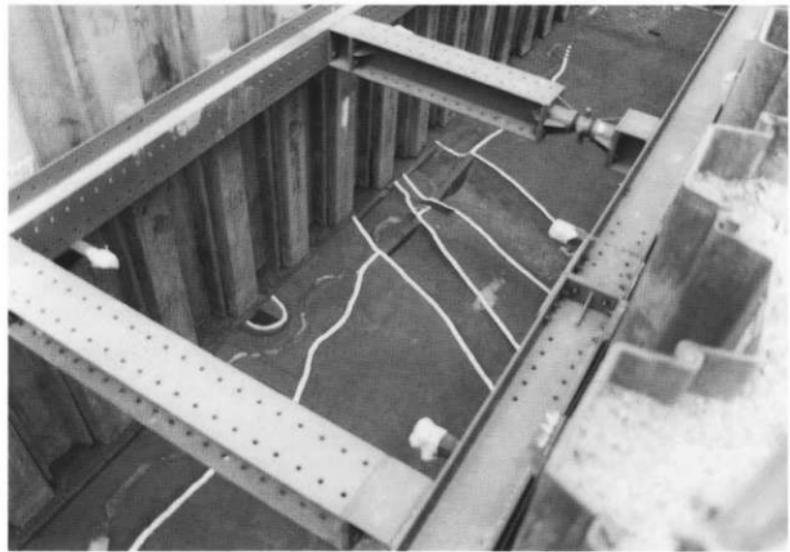
5区 S D 410鉄剣出土状況(北から)



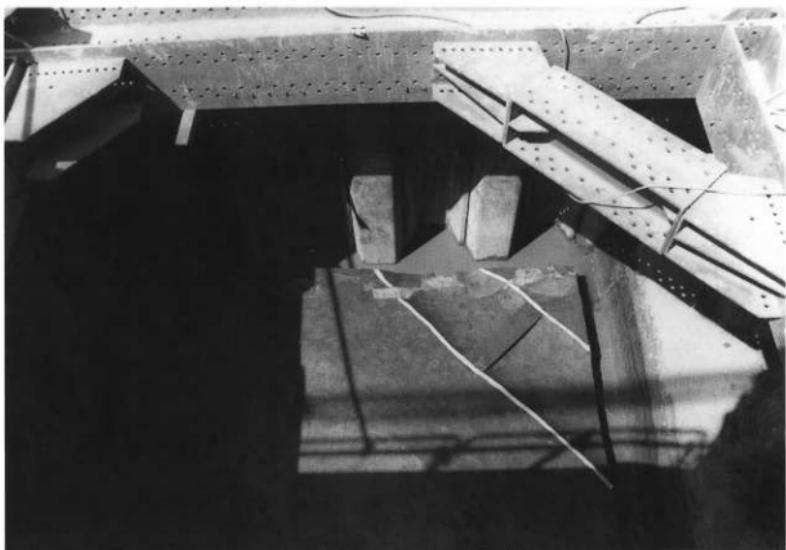
同上 鉄剣出土状況(東から)



4区 遺構検出状況(南から)



4区 遺構検出状況(南東から)



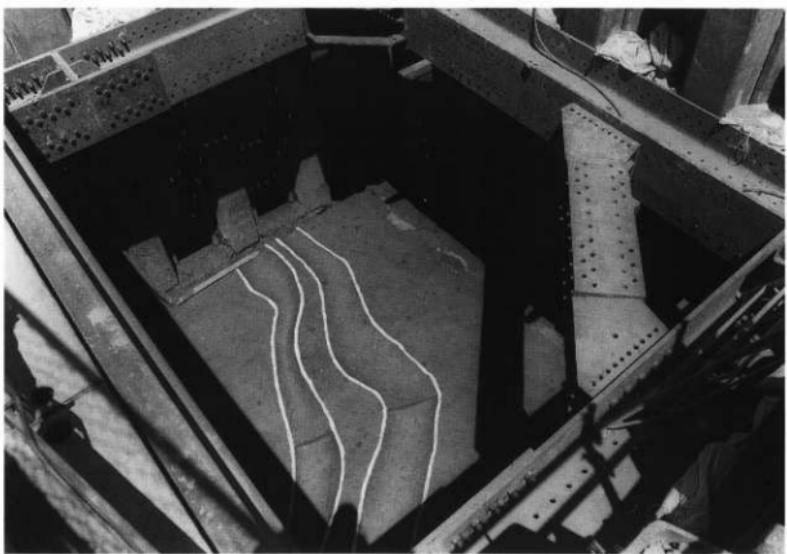
6区 SD509検出状況(南から)



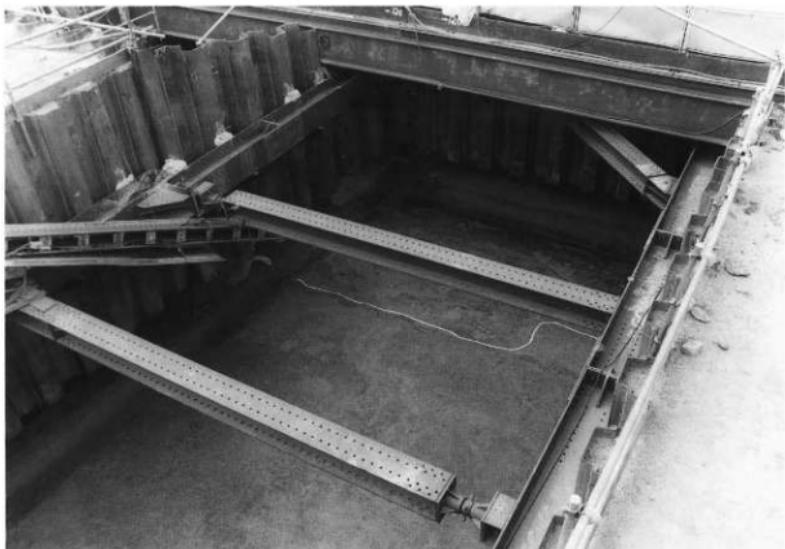
7区 NR501検出状況(北から)



3区 S D 601検出状況(南から)



6区 全景(南東から)



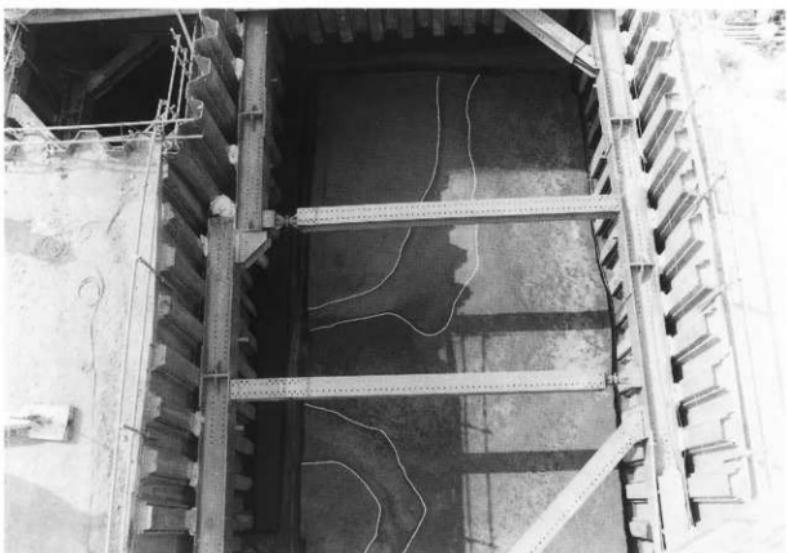
5区 N R 702検出状況(北西から)



5区 全景(北から)



6区 S D 801検出状況(北から)



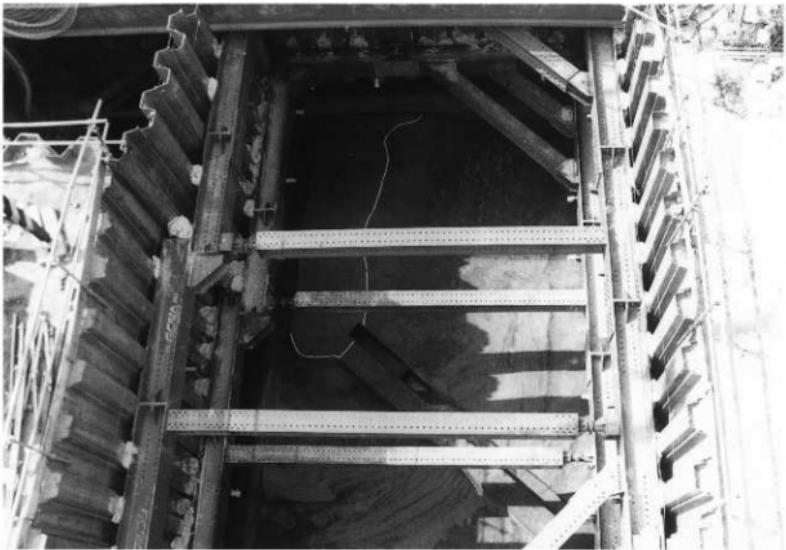
6区 全景(北から)



6区 全景(北から)



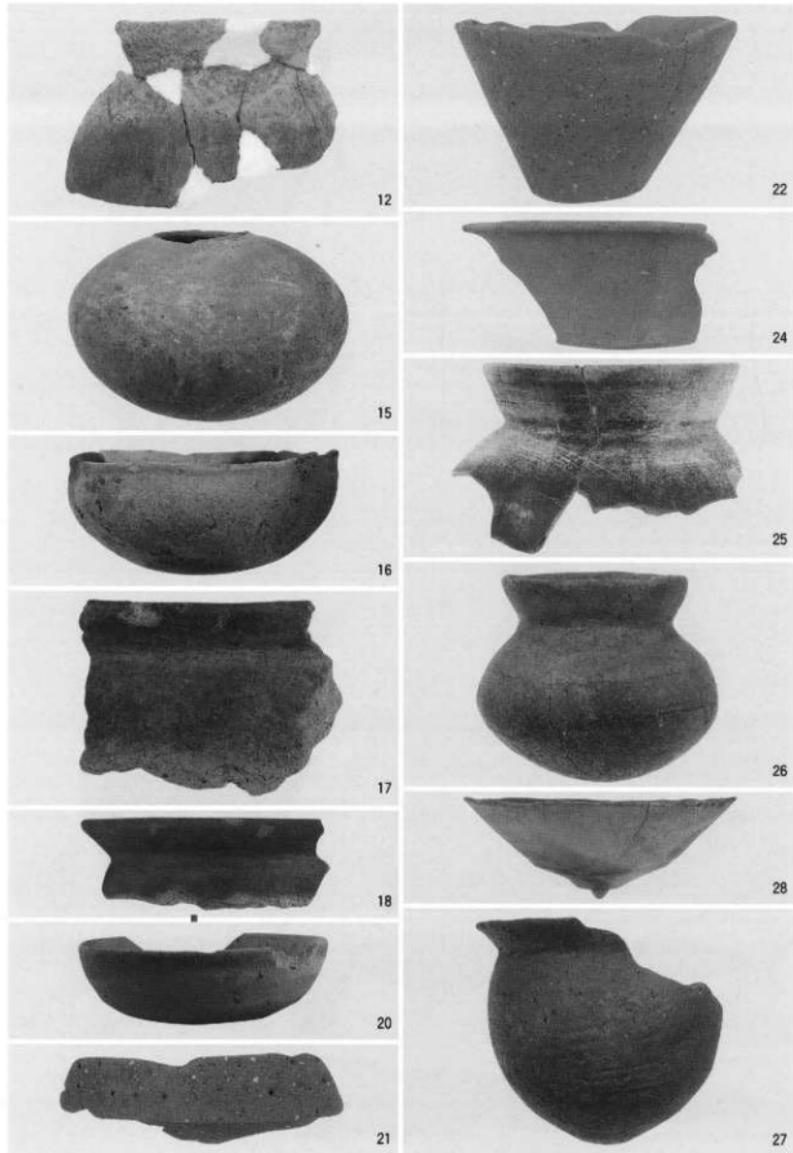
6区 SD903棟出状況(南から)



5区 NR1001検出状況(北から)

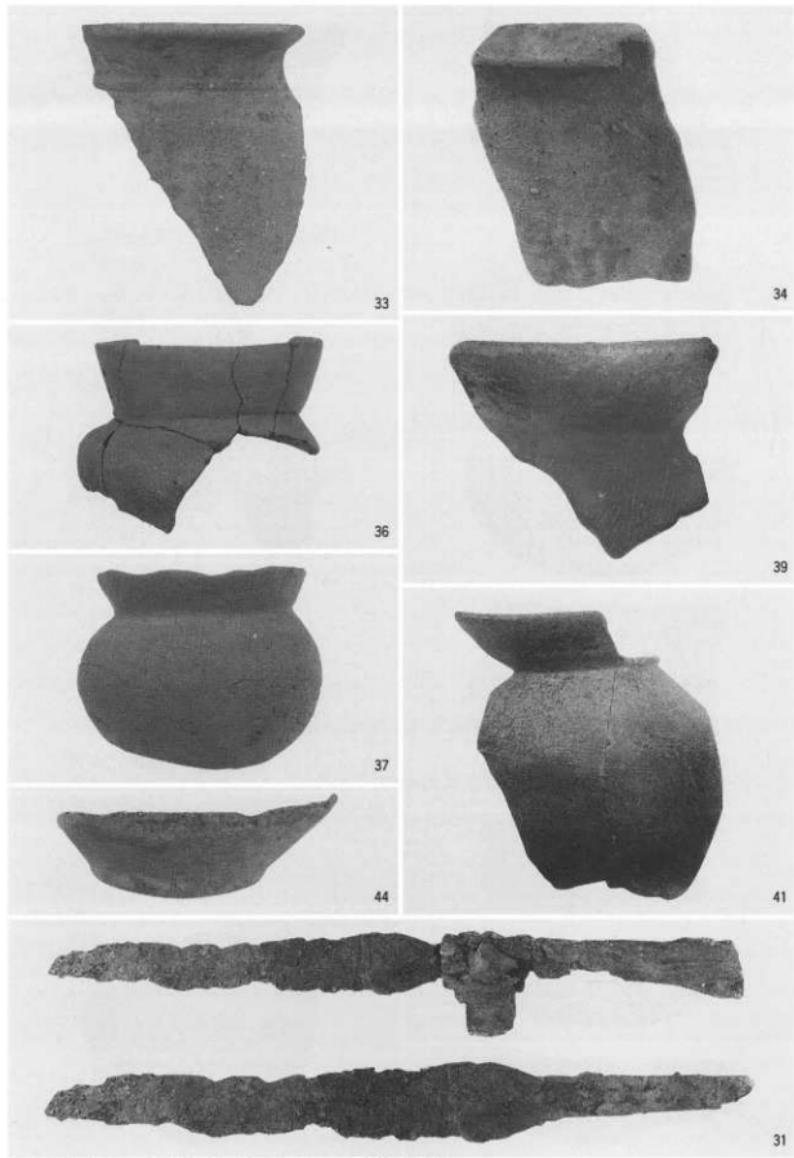


6区 NR1002検出状況(北から)

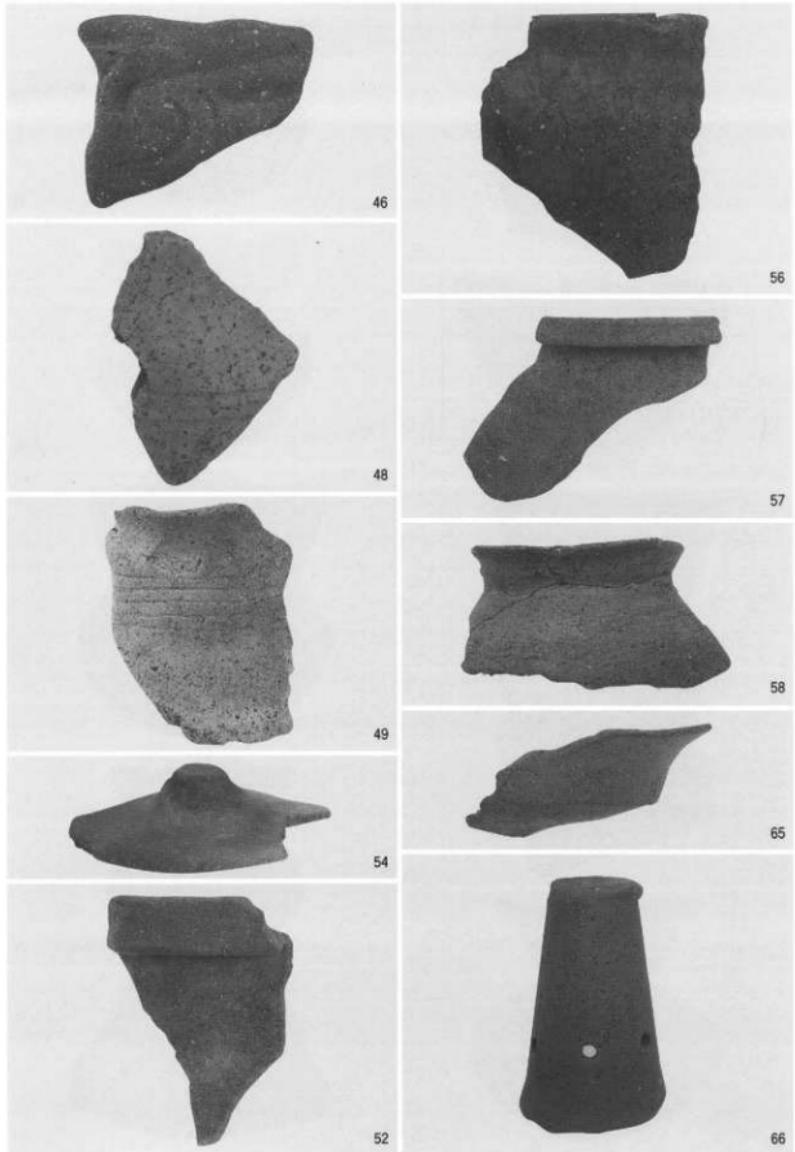


S D107(12)、S K201(15・16)、S K202(17・18)、S D201(20)、N R201(21・22・24・25)、

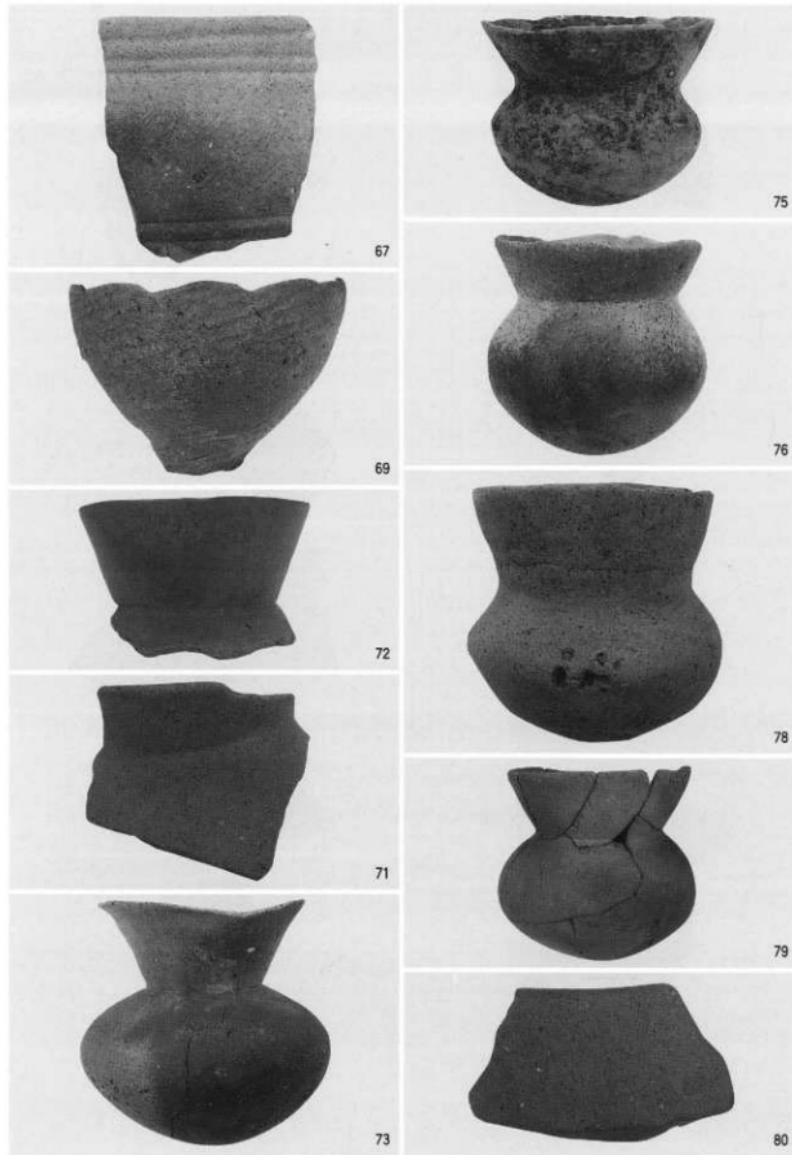
護岸施設301(26～28)出土遺物



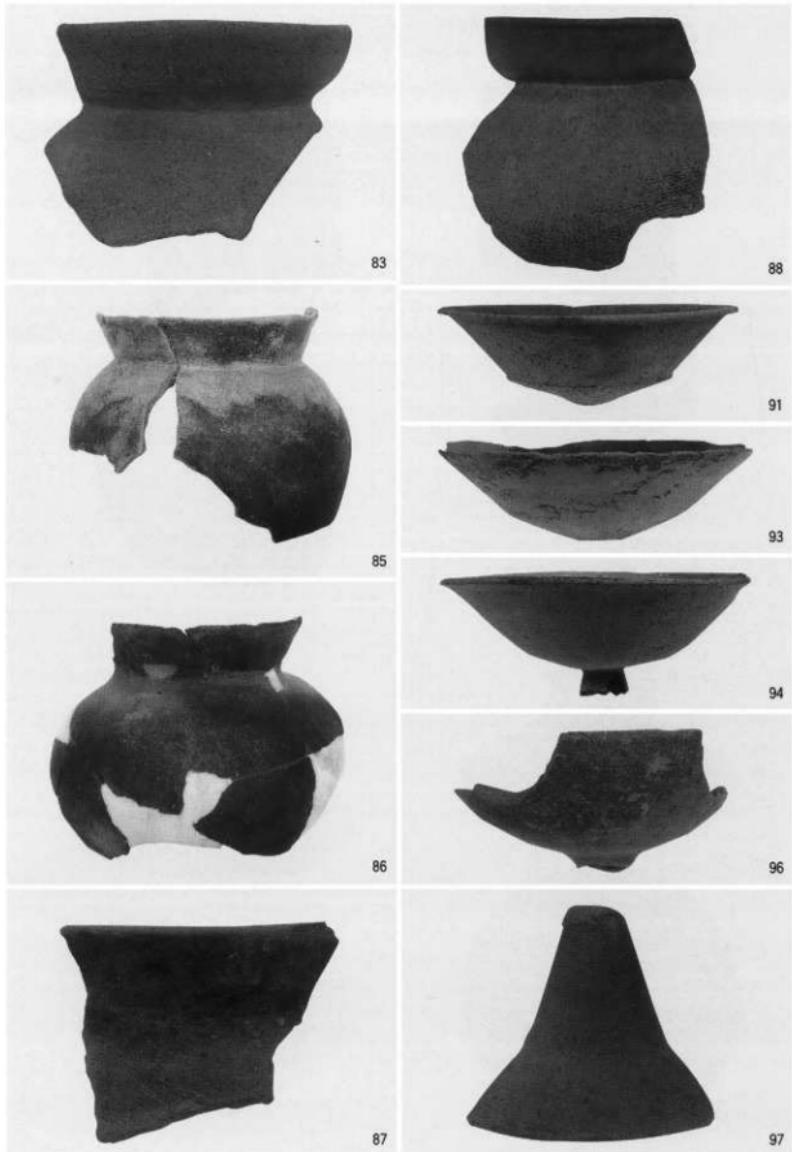
S D 410(31)、N R 401(33・34・36・37・39・41・44)出土遺物



第7層(46・48・49・52・54・56～58・65・66)出土遺物



第7層(67・69・71~73・75・76・78~80)出土遺物



第7層(83・85~88・91・93・94・96・97)出土遺物



102



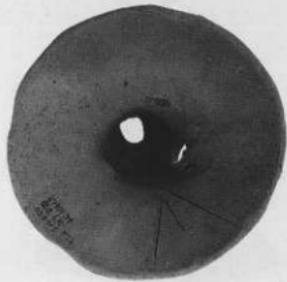
100



99



101



98



103

第7層(98~102)、第15層(103)出土遺物

IV 久宝寺遺跡第50次調査(K H2003-50)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字渋川他(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では龍華町1丁目)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で、平成15年度に実施した大阪竜華都市拠点地区歩行者専用道路人孔部工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第50次調査(KH2003-50)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社(現独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成15年6月2日～6月30日にかけて二宮(旧姓金親)満夫(現 宮崎県教育委員会)が担当した。調査面積は約12m<sup>2</sup>である。現地調査においては、伊藤静江・田島宣子・吉川一栄・若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成17年5月2日～平成18年2月28日に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測・圓面トレース・山内千恵子、圓面レイアウト・原田昌則、遺物写真撮影－垣内洋平が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 基準点測量については下記の機関に委託した。  
株式会社ウエスコ大阪支社
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力を受けた。  
都市基盤整備公団関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)、株式会社ハンシン建設、ニチワ建設株式会社
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、369頁に提示した。

## 本　文　目　次

第1章 調査に至る経過 .....	363
第2章 調査概要 .....	364
第1節 調査の方法と経過 .....	364
第2節 検出遺構と出土遺物 .....	364
第3章 まとめ .....	369

## 挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	.....	363
第2図	1区平断面図	.....	365
第3図	1区 S D101出土遺物実測図	.....	366
第4図	2区平断面図	.....	367
第5図	2区4層、S D201出土遺物実測図	.....	367
第6図	3区平断面図	.....	368
第7図	3区 S K301出土遺物実測図	.....	369

## 図 版 目 次

図版一	1区 西壁	.....	図版三 3区 東塙
	1区 1面 S D101、S D102検出状況	.....	3区 全景
	1区 2面 S D103検出状況	.....	3区 S E301検出状況
図版二	2区 北壁	.....	図版四 S D101、2区第4層、S D201
	2区 西壁	.....	S K301
	2区 S D201検出状況	.....	

## 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた三角州上の微高地に位置する縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡である。久宝寺遺跡における発掘調査は、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道建設に伴う調査を嚆矢とし、大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されている。これらの調査では縄文時代後期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが認識されている。

今回、久宝寺遺跡第50次調査を実施した旧国鉄竜華操車場跡地内の発掘調査は、1988年(昭和63年)の八尾市教育委員会によるJR久宝寺駅の駅舎新設工事に伴う試掘調査を嚆矢とし、駅舎および駅周辺の整備に関連した発掘調査が(財)八尾市文化財調査研究会・(財)大阪府文化財センターにより実施されている。さらに、1997年(平成9年)以降は「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点地区画整理事業」の一環として、公共施設および新設道路を中心とした発掘調査の計画が策定され、(財)八尾市文化財調査研究会・(財)大阪府文化財センターにより発掘調査が継続的に実施されてきた。これらの発掘調査の結果、縄文時代晩期～近世に至る膨大な調査成果が得られている。特に、旧国鉄竜華操車場跡地内の中央部以西で実施された発掘調査では、古墳時代初頭前半(庄内式古相)～前期前半(布留式古相)の居住域・墓域・生産域の広がりが明らかにされおり、当該期の集落の在り方を考える上で示唆に富む調査成果が得られている。なお地理・歴史的環境の詳細については「本書I－第2章」を参照されたい。

本書で報告する久宝寺遺跡第50次調査(KH2003-50)は、歩行者専用道路人孔部建設に伴って実施した発掘調査である。調査面積は12m<sup>2</sup>を測る。調査位置は旧国鉄竜華操車場跡地内の東部にあたり、平成12年度に当調査研究会が市立病院建設に伴って実施した第33次調査(KH2000-33)地の北に隣接している。発掘調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、都市基盤整備公団関西支社と(財)八尾市文化財調査研究会による業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。現地発掘調査は平成15年6月3日～6月5日である。内業整理業務は平成17年5月2日～平成18年2月28日に実施した。



第1図 調査地位置図(S=1/2500)

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、竜華都市拠点地区歩行者専用道路人孔部に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第50次調査(KH2003-50)にあたる。調査地は東西方向に伸びる道路部分に設定した2×2m規模の人孔3箇所で、調査面積は約12m<sup>2</sup>を測る。調査区名は西から東に向かって1区～3区と呼称した。

調査区全域の地区割については、竜華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第IV系〔日本測地系〕(原点-東経136°00'、北緯36°00'・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I～Ⅷ)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をⅧと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1～25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区的呼称については、東西方向はアルファベット(西からA～J)、南北方向は算用数字(北から1～10)で示し、1A地区～10J地区とした。なお個々の地点表記においては国土座標値を入れる方法を取った(本書14～15頁参照)。それによれば1区がⅧ-9-10F地区、2区がⅧ-15-3E地区、3区がⅧ-15-5G地区にある。各調査地点中央部の国土座標値は1区(X=-153.198.927、Y=-37.654.159)、2区(X=-153.228.069、Y=-37.573.104)、3区(X=-153.245.738、Y=-37.538.561)である。

調査の結果、奈良時代後期を中心とした遺構を検出した他、遺物としては古墳時代後期以降の遺物が少量している。

### 第2節 検出遺構と出土遺物

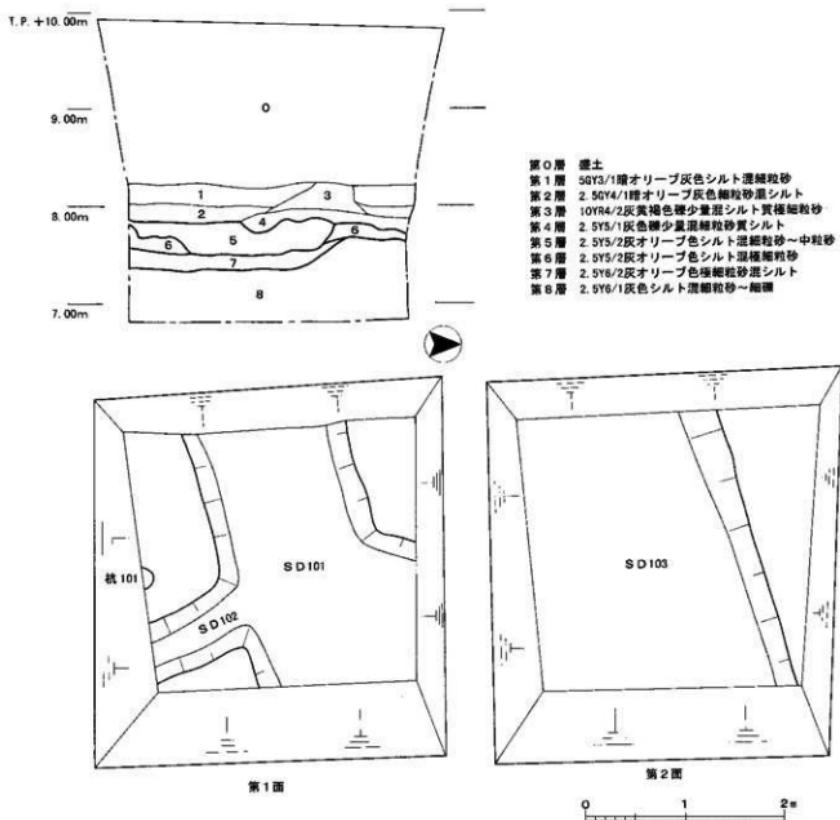
#### 1) 1区の概要

西端に設定した調査区である。1.6m前後の盛土を取り除くと下部に鉄道敷設以前(明治期後半)の水田作土層が2層(第1・2層)存在しており、第3層はその水田に伴う畦畔と考えられる。第4層は瓦器焼を含む包含層である。第6層は第1面を構成する2.5Y5/2灰オリーブ色シルト混極細粒砂である。第8層はシルト混細粒砂～細礫が優勢な河川堆積層で、調査部分での層厚は0.8m以上を測る。上面が第2面である。

遺構は第1面として、現地表下2.0～2.1m(T.P.+7.8m)前後に存在する第6層上面で、奈良時代の溝2条(SD101・SD102)、さらに0.15m下部の第8層上面(T.P.+7.65m)で第2面として奈良時代以前の溝1条(SD103)を検出した。



写真1 調査風景



第2図 1区平断面図(S=1/50)

## &lt;層序&gt;

第0層：盛土。現地表の標高はT.P.+9.9m。

第1層：5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混細粒砂。水田作土。層厚0.2m前後。

第2層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混シルト。水田作土。層厚0.1m。

第3層：10YR4/2灰黄褐色礫少量混シルト質極細粒砂。酸化鉄斑。畦畔。層厚0.3m。

第4層：2.5Y5/1灰色礫少量混細粒砂質シルト。層厚0.1~0.2m。瓦器棟を含む。

第5層：2.5Y5/2灰オリーブ色シルト混細粒砂～中粒砂。SD 101の埋土。

第6層：2.5Y5/2灰オリーブ色シルト混極細粒砂。マンガン斑。層厚0.1~0.2m。第1面のベース。

第7層：2.5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂混シルト。S D 103の埋土。

第8層：2.5Y6/1灰色シルト混細粒砂～細礫。酸化鉄斑。一部でラミナを認める。層厚0.8m以上。第2面のベース。

#### ＜遺構・遺物＞

##### 第1面

###### S D 101

概ね東西方向に伸びるもので、南東部でS D 102と合流している。

検出部分で長さ2.65m、幅1.6m、深さ0.35mを測る。埋土は2.5Y5/2灰オリーブ色シルト混細粒砂～中粒砂である。遺物は土師器・須恵器の小片が極少量出土している。土師器碗の小片を1点(1)図化した。平城宮分類の椀Aに近似した器種と考えられる。復元口縁11.6cmを測る。器面調整は風化のため明瞭でない。色調は赤褐色。奈良時代後期に比定される。

###### S D 102

南東～北西に伸びるもので、北端でS D 101と合流している。検出部分で長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.11mを測る。埋土はS D 101と同様である。須恵器片が1点出土しているが、小片のため時期は明確でない。

##### 第2面

###### S D 103

東西方向に伸びるが、北肩のみの検出であるため、全容は不明である。検出部分で長さ2.8m、幅2.4m以上、深さ0.15mを測る。埋土は2.5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

#### 2) 2区の概要

調査区の層相は第0層が盛土で層厚0.6m。第1層が水田作土、第2層は酸化鉄・マンガン斑が顕著な底土。第3～5層が古代～中世の土師器・須恵器を含む包含層。第6層が奈良時代後期の遺構構築面である。第7～9層は中粒砂～細礫が優勢な洪水砂層で、1区で検出した第8層に対応している。遺構は、現地表下1.0m(T.P.+8.2m)前後に存在する第6層上面で、奈良時代の溝1条(S D 201)を検出した。

#### ＜層序＞

第0層：盛土。現地表の標高はT.P.+9.2m。

第1層：7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト。水田作土。酸化鉄・マンガン斑。層厚0.1m。

第2層：10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト。酸化鉄・マンガン斑。層厚0.15m。

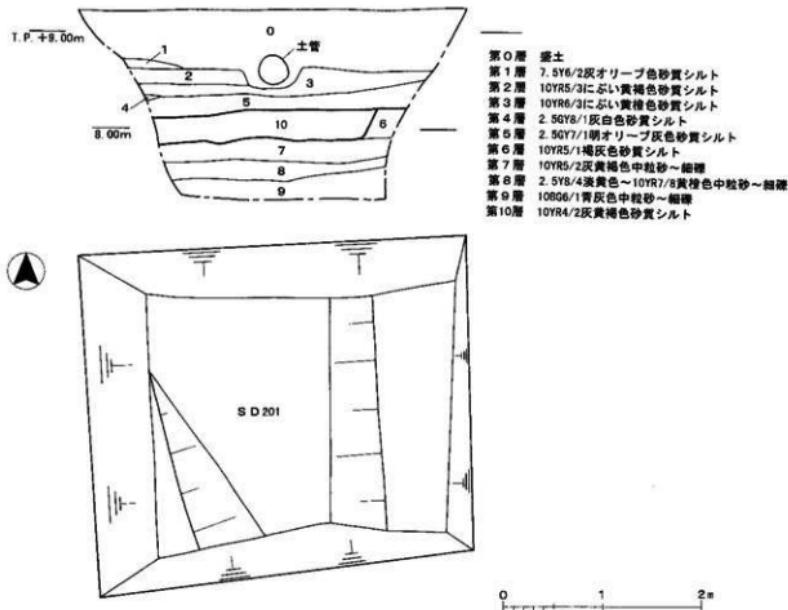
第3層：10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト。酸化鉄・マンガン斑。層厚0.1～0.3m。古代～中世の土師器を少量含む。

第4層：2.5GY8/1灰白色砂質シルト。層厚0.05m。酸化鉄・マンガン斑。古代～中世の土師器・須恵器を少量含む。

第5層：2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト。酸化鉄・マンガン斑。古代～中世の土師器・須恵器を少量含む。層厚0.1～0.3m。



第3図 1区 S D 101  
出土遺物実測図



第4図 2区平断面図(S=1/50)

第6層：10YR5/1褐色砂質シルト。酸化鉄・マンガン斑。層厚0.3m。第1面のベース。

第7層：10YR5/2灰黄褐色中粒砂～細礫。洪水砂層。層厚0.1～0.15m。

第8層：2.5Y8/4淡黄色～10YR7/8黄橙色中粒砂～細礫。洪水砂層。層厚0.1～0.2m。

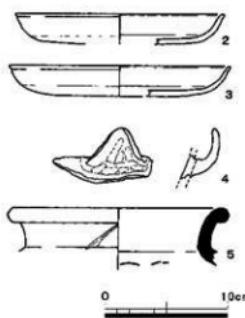
第9層：10BG6/1青灰色中粒砂～細礫。洪水砂層。グライ化。層厚0.3m以上。

第10層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト。SD 201の埋土。

#### <遺構・遺物>

##### S D 201

南北方向に直線的に伸びる。検出部分で長さ2.4m、幅1.3～2.3m、深さ0.32mを測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色砂質シルトである。土師器・須恵器の小片が少量出土している。3点(3～5)を図化した。3は土師器皿Aの小片である。復元口径18.0cm、器高2.5cmを測る。器面調整はa 0手法。色調は赤褐色。4は鍋Bないしは壺Bに伴う把手と推定される。舌状の形態で高さ4cm、下幅5.5cmを測る。色調は赤褐色。3・4はともに奈良時代後半に比定される。5は須恵器甕である。口縁部の小



第5図 2区 第4層(2)、SD 201(3～5)

出土遺物実測図

片で、復元口径17.3cmを測る。頸部外面にヘラによる直線文が施されている。色調は淡灰色。6世紀後半に比定される。遺物には時期幅があるが、遺構層属時期は奈良時代後半が考えられる。

#### 第4層出土遺物

土師器皿1点(2)を図化した。2は土師器皿Aに分類される。小片で復元口径17.0cm、器高2.5cmを測る。色調は赤褐色。奈良時代後半に比定される。

#### 3) 3区の概要

調査区の層相は第0層が盛土で層厚0.85~1.0m。第1・2層が水田作上、第3・4層は古代~中世の土師器・須恵器を含む包含層。第5・6層はシルト質極細粒砂が優勢な水成層。第7層が奈良時代の遺構構築面である。第8層が洪水砂層で1区の第8層、2区の第7~9層に対応する。遺構は、現地表下1.7m(T.P.+7.6m)前後に存在する第7層上面で奈良時代の土坑1基(SK301)を検出した。

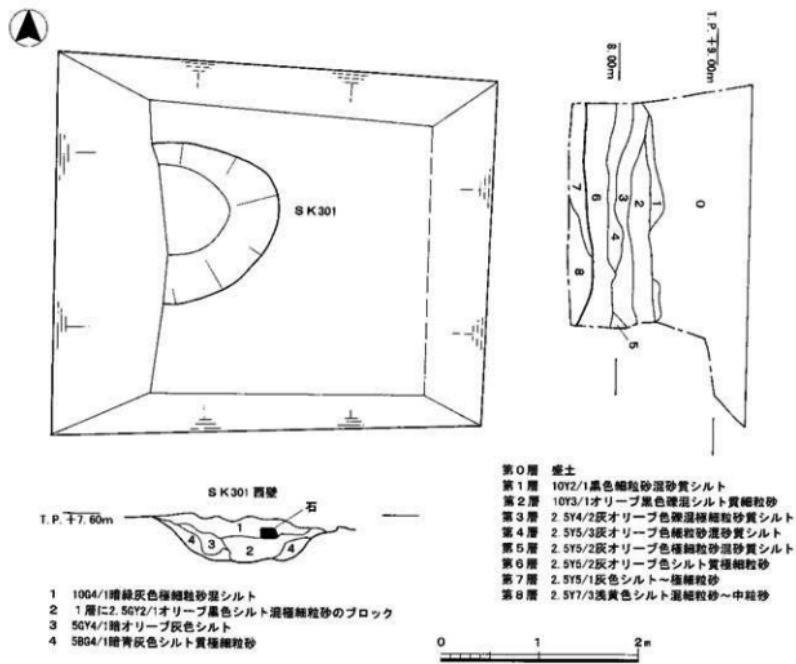
#### <層序>

第0層：盛土。現地表の標高はT.P.+9.35m。

第1層：10Y2/1黒色細粒砂混砂質シルト。やや粘性。水田作土。層厚0.05~0.1m。

第2層：10Y3/1オリーブ黒色疊混シルト質細粒砂。やや粘性。水田作土。層厚0.2m。

第3層：2.5Y4/2灰オリーブ色疊混極細粒砂質シルト。層厚0.05~0.2m。土師器を少量含む。



第4層：2.5Y5/3灰オーリーブ色細粒砂混砂質シルト。層厚0.05~0.15m。土師器を少量含む。

第5層：2.5Y5/2灰オーリーブ色極細粒砂混砂質シルト。層厚0.1~0.3m。

第6層：2.5Y5/2灰オーリーブ色シルト質極細粒砂。土壤化層。マンガン斑、酸化鉄の管状斑点が認められる。層厚0.3m。

第7層：2.5Y5/1灰色シルト～極細粒砂。やや粘性。酸化鉄の管状斑点が認められる。層厚0.2m以上。S K 301の構築面。

第8層：2.5Y7/3浅黄色シルト混細粒砂～中粒砂。洪水砂層。ラミナが認められる。層厚0.25m以上。

#### <遺構・遺物>

##### S K 301

調査区の西部で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.15m、南北幅1.65m、深さ0.45mを測る。埋土は4層からなる。土師器・須恵器の小片が極少量出土している。須恵器杯身1点(6)を図化した。6は杯身の底部片である。復元底径9.3cmを測る。高台はやや雑な作りで接地面は水平でない。色調は淡灰色。奈良時代に比定される。



第7図 3区 S K 301  
出土遺物実測図

## 第3章まとめ

小規模な調査であったが1~3区で奈良時代後半を中心とする遺構・遺物を検出した。当該期の集落は調査区より南西の第23次調査1査(KH97-23)の23~26区、南に隣接する八尾市立病院建設に伴う第33次調査2査(KH2000-33)で検出されており、広範囲におよぶことが想定される。特に第23次調査の23~26区から第33次調査の西部では居住域を構成する掘立柱建物を中核とした遺構群が検出されている他、三彩小壺、墨書き人面土器、円面鏡等の遺物が出土しており、東部に存在した渋川廃寺との関連を含めて集落の性格を考える必要があろう。

#### 註記

註1 本書I報告

註2 成海佳子・樋口 薫・金親満夫 2001「4. 久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

#### 参考文献

- ・奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第32冊
- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器I 都城の土器集成』
- ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器II 都城の土器集成』





1区 西壁(東から)



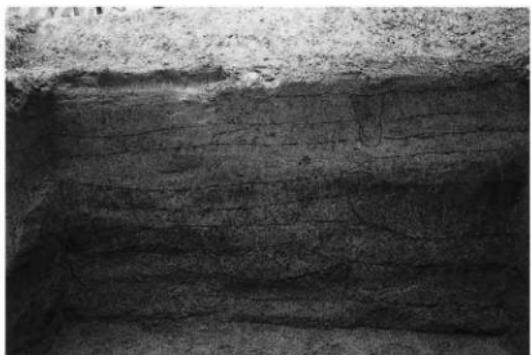
1区 第1面 SD101・102検出状況(西から)



1区 第2面 SD103検出状況(西から)



2区 北壁(南から)



2区 西壁(東から)



2区 SD201検出状況(南から)



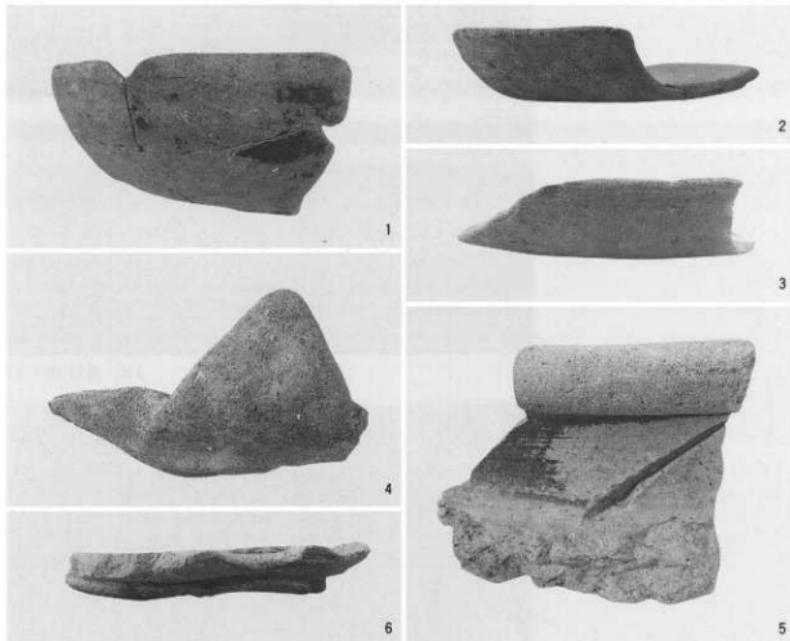
3区 東壁(西から)



3区 全景(西から)



3区 SK 301検出状況(南から)



S D101(1)、2区第4層(2)、S D201(3~5)、S K301(6)出土遺物

V 久宝寺遺跡第63次調査(KH2005-63)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市龍華町1丁目地内で実施した大阪竜華都市拠点地区1号街区公園防火水槽設置工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第63次調査(KH2005-63)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が独立行政法人都市再生機構西日本支社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成17年5月10日から7月7日(実働39日)にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は93.6m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査においては、伊藤静江・垣内洋平・鈴木裕治・徳谷尚子・永井律子・村井俊子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成17年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測—伊藤・北原清子・村井・山内千恵子、図面レイアウト—荒川、図面トレース—山内、遺物写真撮影—荒川・垣内が行い、他に國津れいこ・鈴木・徳谷の協力を得た。
1. 本書の執筆および構成は、荒川が行った。
1. 基準点測量は、株式会社かんこうに委託した。
1. 放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からの協力を受けた。  
独立行政法人都市再生機構西日本支社、株式会社シンセー興建
1. 出土遺物の形式・編年で参考とした文献については、399頁に示した。

## 本　文　目　次

第1章 はじめに .....	371
第2章 調査概要 .....	372
第1節 調査の方法と経過 .....	372
第2節 屋序 .....	374
第3章 検出遺構と出土遺物 .....	378
1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物 .....	378
2) 遺構に伴わない出土遺物 .....	397
第4章 自然科学分析 .....	400
第5章 まとめ .....	405

## 挿図目次

第1図	調査地周辺図	371
第2図	調査地位置図および地区割図	373
第3図	西塙・北塙断面図	375-376
第4図	S E 101平断面図	379
第5図	第1面～第4面検出遺構平面図	380
第6図	第5面～第8面検出遺構平面図	381
第7図	流路201出土遺物実測図	384
第8図	流路201・流路301断面図	385
第9図	流路301出土遺物実測図	386
第10図	S D301断面図	387
第11図	S D401～S D405・S D501断面図	388
第12図	S O601高まり内出土遺物実測図	389
第13図	S I 701平断面図	391
第14図	S I 701出土遺物実測図	392
第15図	S K801平断面図	393
第16図	S K801出土遺物実測図	394
第17図	S K802・S K803平断面図	395
第18図	S K802出土遺物実測図	396
第19図	S K803出土遺物実測図	397
第20図	S D801出土遺物実測図	397
第21図	遺物に伴わない出土遺物	398

## 写真目次

写真1	調査地全景	372
写真2	作業風景	373

## 表目次

第1表	S O101～S O103法景表	383
第2表	S D101～S D107法景表	383

## 図版目次

- 図版一 第1面全景  
流路201部分
- 図版二 第3面全景  
流路301部分
- 図版三 流路301遺物出土状況  
流路201・流路301部分西壁断面
- 図版四 第4面全景  
第4面遺構部分
- 図版五 第6面全景  
S O601検出状況
- 図版六 第7面全景  
S I 701検出状況
- 図版七 第8面全景  
S K801・S K802・S K803検出状況
- 図版八 流路201・流路301出土遺物
- 図版九 流路301・S O601・S D801・S I 701出土遺物
- 図版一〇 S I 701・S K801・S K802出土遺物
- 図版一一 S K802・S K803出土遺物
- 図版一二 遺構に伴わない出土遺物



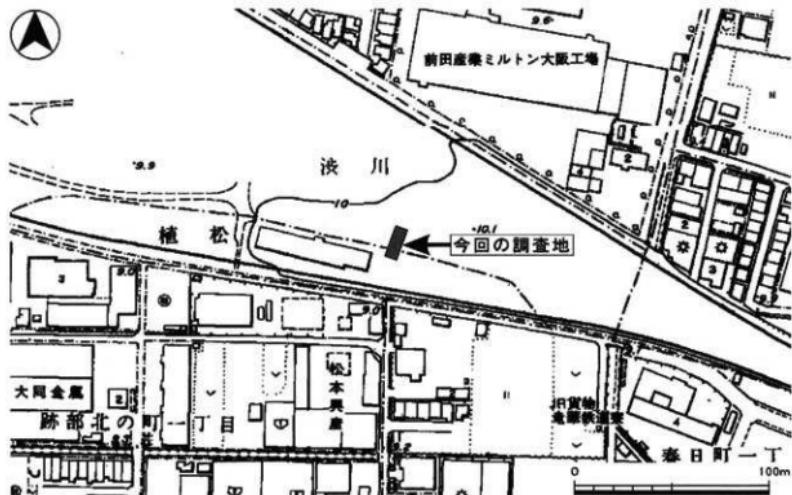
## 第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市北西部を中心とする東西約1.7km、南北約1.8kmの広範囲に及ぶ縄文時代から近現代にかけての複合遺跡である。現在の行政区画では、北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・龍華町1～2丁目・北龟井町1～3丁目、および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目が遺跡の範囲である。南は跡部遺跡・亀井遺跡、西は亀井北遺跡・加美遺跡、北は佐堂遺跡と隣接し、遺跡範囲内には、久宝寺内町遺跡・渋川廃寺が所在する。

久宝寺遺跡が立地する中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部に当たり、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北ないし西方向に放射状に流下している。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた沖積地に展開する遺跡で、遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P. +6.6～12.0mを測る。

今回の調査地は、久宝寺遺跡の南部に当たり、遺跡を東西に横断する形で占地している旧国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)とその周辺を含む「大阪竜華都市拠点地区」の範囲内にある。「大阪竜華都市拠点地区」においては、平成9(1997)年度以降、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、新設道路部分および公共施設建設地を中心とした発掘調査が、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター)・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当調査研究会とする)によって継続的に実施されている。

本書で報告する久宝寺遺跡第63次調査(KH2005-63)は、上記事業の一環として、当調査研究



第1図 調査地周辺図(S=1/2500)

会が、独立行政法人都市再生機構西日本支社の委託を受けて実施したものである。

久宝寺遺跡における既往の調査の概要、および久宝寺遺跡を巡る地理的・歴史的環境の詳細については、本書「I 久宝寺遺跡第23次調査」第2章(3~10頁)を参照されたい。

当調査地周辺においては、南西側・南側で当調査研究会による第29次調査・跡部遺跡第33次調査、西側では同じく第52次調査が実施されている。周辺で実施された既往の調査成果を、既に発掘調査報告書が刊行されている第29次調査・跡部遺跡33次調査の成果に基づき概観する。

第29次調査では、弥生時代中期後半から近世に至る遺構・遺物が検出されている。以下に、その主なものを挙げると、①弥生時代中期後半から後期前半の畦畔状遺構、②弥生時代後期後半の土器集積群、③古墳時代前期前半の道路状遺構・水田からなる生産域、④飛鳥時代・奈良時代の河川と出土した墨書き筒、⑤近世以降の生産域を構成する遺構群を挙げることができる。①の畦畔状遺構は、当調査地の南西側で検出されているが、南東側の跡部遺跡33次調査でも、礫断面上で同様の盛土が2箇所確認されており、広範囲に分布していることがわかる。④の奈良時代の河川から出土した墨書き筒は、近隣に役所が存在したことを示す内容のものである。

跡部遺跡33次調査の主な調査成果を挙げると、古墳時代中期の流路埋土から出土した子持勾玉を挙げることができる。この子持勾玉は未完成と考えられ、近隣に古墳時代中期の玉の生産地があったことを示唆するものとされている。

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第63次調査(KH2005-63)は、1号街区公園防火水槽設置工事に伴い実施したものである。

調査地は、八尾市龍華町1丁目の竜華操車場跡地の東部に位置し(第1図)、南南東ー北北西に長辺を持つ長方形を呈し、調査面積は93.6m<sup>2</sup>を測る。

現地調査は、住宅・都市整備公団関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)と八尾市教育委員会と当調査研究会の3者による「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、独立行政法人都市再生機構西日本支社と当調査研究会業務委託契約書の締結後、平成17年5月10日に着手し、平成17年7月7日に終了した。内業整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成17年9月30日に終了した。



写真1 調査地全景(北から)

現地調査に際しては八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+9.8m前後)下1.12mを機械掘削の対象範囲とし、以下3.15mについては人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

なお、調査区の北側と西側に地層断面観察用の壁(上幅0.5m)を設定し、地層断面の記録保存を行った。その際、①土留めの鋼矢板を支えるための梁の設置、②壁の崩落の予防、③壁法面の勾配による遺構検出面積減少の抑制のため、4回に分けて壁の設定・地層断面の記録保存・人力による壁の除去を行った。

調査地の地区割については、竜華操車場跡地とその周辺において継続して実施される調査に対応するため、平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した。地区割の設定については、本書「I 久宝寺遺跡第23次調査」第3章第1節(14~15頁)を参照されたい。今回の調査地は、この地区割では、Ⅳ-16-6~8 F・Gに位置する(第2図)。

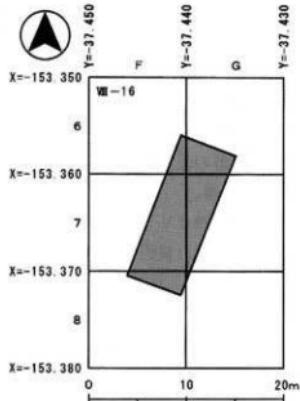
遺構検出面の呼称については、機械掘削が終了し、人力掘削による調査で遺構を検出した面を「第1面」と呼称し、以下、上位の遺構検出面から順に番号を付した。遺構名については、遺構略号+遺構検出面番号+遺構番号(2桁)で表現した(例、S K101=第1面検出の土坑1)。

調査の結果、弥生時代前期後半の土坑、弥生時代後期前半の竪穴住居・土坑・溝、弥生時代後期後半の落込み、古墳時代前期の土坑・溝、古墳時代中期の溝、古墳時代後期・飛鳥時代後半の流路、奈良時代前期から平安時代前期の流路、近世の井戸・土坑・溝・溝状の落ち込み、近世後期から近代の井戸、近代の土坑を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)で10箱を数える。

整理業務は、遺物洗浄など現地調査時に一部着手したものもあるが、基本的には現地調査終了後に隨時実施した。図面・写真・遺物の整理、そして、調査・編集を行い、報告書の刊行に至る作業を進めた。遺物・遺構に関しては、報告図面作成・トレース・報文作成を行なった。これら一連の作業の後、図面・図版のレイアウト・全体文の検討、体裁の調整等の編集作業を行い、平成17年9月30日に終了した。



写真2 作業風景(南から)



第2図 調査地位置図および地区割図  
(S=1/500)

## 第2節 層序

当調査地で確認した地層は40層余りで、以下に記載する。なお、調査地全体を覆う S O 601埋土を除く遺構埋土については各遺構の断面図に、塗のみで確認した小規模な遺構埋土については第3図に記載した。

0-1層：10YR3/1黒褐色砂質シルト+小型の大礫～粗粒の中礫。【竜華操車場廃止以降の盛土】  
0-2層：10YR5/6黄褐色極粗粒砂～粗粒砂+2.5Y5/3黄褐色シルトのブロック少量。【竜華操車

### 場造成時の客土】

1層：5GY3/1暗オリーブ灰色細粒の中礫以細の礫混じる砂質粘土質シルト。2層のブロックが少量混じる。グライ化。

2層：5G3.5/1暗緑灰色細粒の中礫以細の礫混じる砂質粘土質シルト。グライ化。

調査区北西隅では、下位に5G3.5/1暗緑灰色粘土質シルトが残り、その近くではブロック状に混じる。

3層：5G4/1暗緑灰色細粒の中礫以細の礫混じる砂質粘土質シルト(2層より泥質)。グライ化。

4層：5G4/1暗緑灰色細粒以細の砂礫混じる粘土質シルト+2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質細粒砂～極細粒砂が下位層と共にブロック状に混じる。S O 103北側の一部では細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。グライ化。下面是第1面と第2面の一部。【1～4層：近世以降竜華操車場造成時までの水田耕作土】

5層：2.5Y4/1黄灰色細粒の中礫以細の礫混じる(6層より多く混じる)砂質シルト+5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂が斑状に混じる。酸化鉄管状密。下面是第2面。

6層：2.5Y4.5/1黄灰色細粒の中礫以細の礫混じる砂質シルト。酸化鉄管状密・酸化マンガン斑点状多量。

7層：2.5Y4/1黄灰色細粒の中礫以細の礫少量混じる粘土質砂質シルト。酸化鉄管状密・酸化マンガン斑点状少量。

8層：2.5Y4/2暗灰黄色粘土質砂質シルト。酸化マンガン斑点少量。

9層：2.5Y4.5/1黄灰色砂質(細粒～極細粒)シルト。

10層：2.5Y4.5/1黄灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。酸化マンガン斑点状少量。S D 301-IIの上位では5Y5/2灰オリーブ色シルト質細粒～極細粒砂(13層の砂)が斑に、S D 401の近くでは細粒の中礫以下のみが少量混じる。初期須恵器・土師器が出土。下面是第3面。

11層：5Y3/2オリーブ黒色細粒の中礫以細の礫混じる砂質シルト。砂がち。

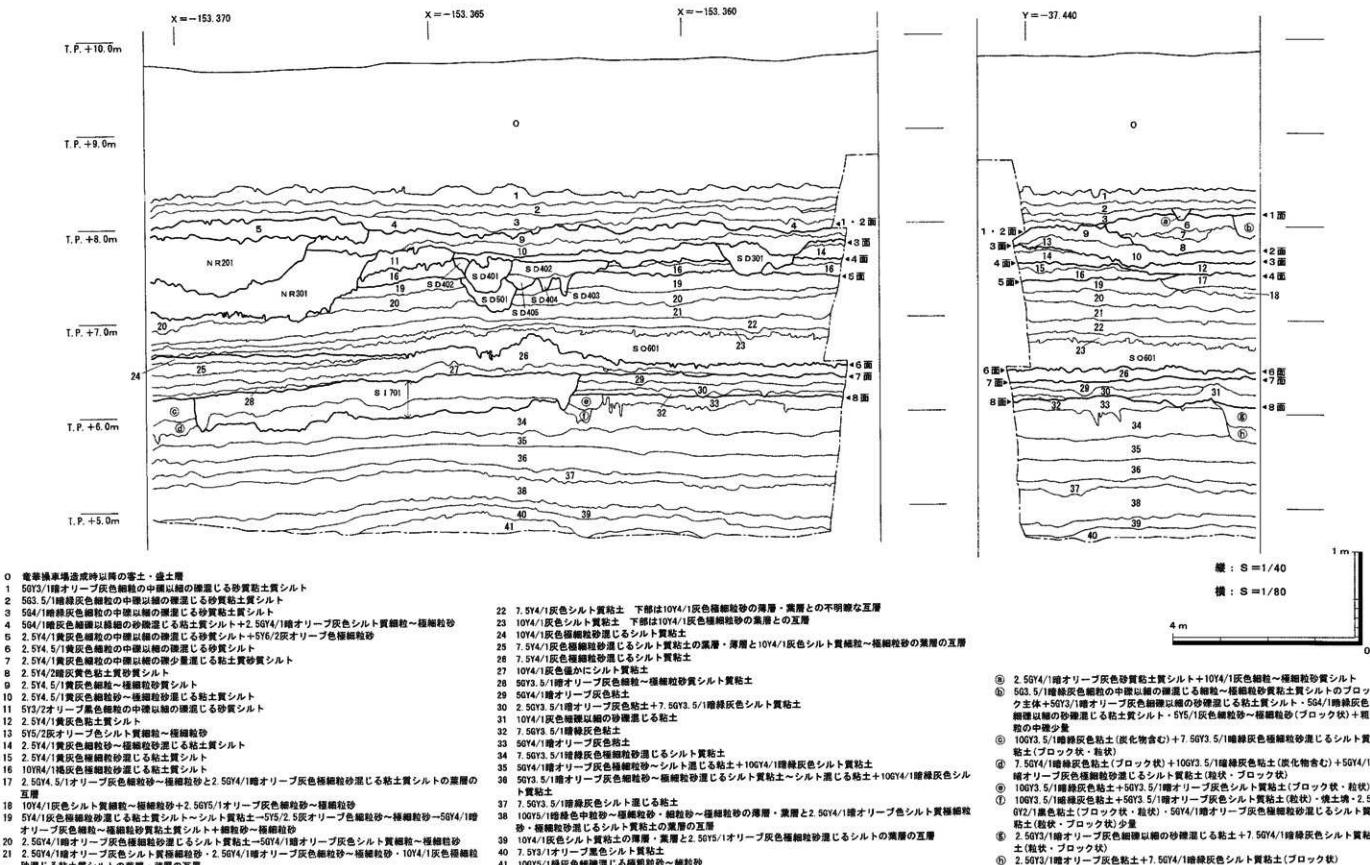
12層：2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト。所により、2.5Y4.5/1黄灰色細粒砂～極細粒砂が層状に少量混じる。以下、15層まで7.5Y4.5/1灰色細粒～極細粒砂混じる粘土質シルトで充填された根痕跡が密に見られる。

13層：5Y5/2灰オリーブ色シルト質細粒～極細粒砂+14層のブロック少量。下面是第4面。

14層：2.5Y4/1黄灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。酸化マンガン斑点状多。所により、2.5Y4.5/1黄灰色細粒砂～極細粒砂が層状に混じる。

15層：2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。酸化マンガン斑点状多。

16層：10YR4/1褐灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。炭化物粒混じる。層の間に粉状の炭化物が



- 多く混じる2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトを挟む。2.5Y5/3黄褐色極細粒砂を斑状に含む。以下、19層にかけて、酸化鉄斑点状・管状に密。下面是第5面。
- 17層：2.5GY4.5/1暗オリーブ灰色(東側上部では2.5Y4.5/1黄灰色)細粒砂～極細粒砂の葉層と2.5GY4/1灰色(同じく2.5Y4/1黄灰色)極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層の互層。東側最下部に10Y4/1灰色極細粒砂混じるシルト質粘土と5Y4/2灰色粗粒砂～極細粒砂の薄層(1.5cm)が1層ずつ見られる。
- 18層：10Y4/1灰色シルト質細粒～極細粒砂。2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂が斑状・層状に混じる。7.5Y4/1灰色粘土で充填された巣穴が見られる。
- 19層：5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルト～シルト質粘土。中部では5Y5/2.5灰オリーブ細粒砂～極細粒砂が不均質に混じり砂が主体となり、下部は細粒砂～極細粒砂をブチ状に含む5GY4/1暗オリーブ灰色砂質(細粒～極細粒)粘土質シルト。粘質土部分に炭化物含む。7.5Y4/1灰色粘土で充填された巣穴が見られる。
- 20層：2.5GY4/1灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。下部になるほど5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質細粒～極細粒砂が層状・斑状に混じり砂が主体となる。シルト質粘土部分に炭化物含む。
- 21層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂・2.5GY4/1灰色細粒砂～極細粒砂・10Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層・薄層の互層。上部ほど砂の葉層が主体で、所により、2.5GY5/1灰色粗粒砂以細の砂が薄層状・斑状に混じる。
- 22層：7.5Y4/1灰色シルト質粘土。分解の進んだ植物遺体を含む。下部は10Y4/1灰色極細粒砂の薄層・葉層との不明瞭な互層。
- 23層：10Y4/1灰色シルト質粘土。下部は10Y4/1灰色極細粒砂の葉層との互層。
- S O 601堆土：上位から、①7.5GY4/1暗緑灰色極粗粒砂以細の砂(葉理見られない)。木本の植物遺体を含む。②10Y4/1灰色細粒～極細粒砂質粘土質シルト。草・木本の植物遺体を含む。③7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～極細粒砂と10Y4/1灰色シルト質極細粒砂の薄層・葉層の互層。植物遺体の葉層を挟む。調査地南部では①・②のみが薄く見られる。各層の層界は不明瞭。下面是第6面。
- 24層：10Y4/1灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。所により、10Y3/1オリーブ黑色極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層を挟む。
- 25層：7.5Y4/1灰色極細粒砂混じるシルト質粘土の葉層・薄層と10Y4/1灰色シルト質細粒～極細粒砂の葉層の互層。
- 26層：7.5Y4/1灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。炭化物粒を含む。分解の進んだ木本・草本の植物遺体を含む。
- 27層：10Y4/1灰色シルト質粘土。
- 28層：5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒～極細粒砂質シルト質粘土。炭化物粒を少量含む。調査地南部のみに見られる。
- 29層：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。炭化物粒少量含み、S I 701の近くでは多く含む。上面は第7面。
- 30層：2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色粘土+7.5GY3.5/1暗緑灰色シルト質粘土(粒状)。炭化物粒と焼土粒を含む。

- 31層：10Y4/1灰色細礫に細の砂礫混じる粘土。炭化物粒・焼土粒少量含む。
- 32層：7.5GY3.5/1暗緑灰色粘土。炭酸鉄の団塊を帶状に含む 調査区の北西部に見られる。
- 33層：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。
- 34層：7.5GY3.5/1暗緑灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。炭化物粒を少量含む。  
僅かに土壤化しており、細い根の痕跡が見られる。以下、37層にかけて5GY4/1暗オリーブ灰色粘土・10Y3/1黒色シルト質粘土で充填された巣穴が見られる。上面は第8面。
- 35層：5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～シルト混じる粘土+10GY4/1暗緑灰色シルト質粘土(粒状)。所により、炭化物を粒状・炭化した植物遺体を葉層状に含む。
- 36層：5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土～シルト混じる粘土+10GY4/1暗緑灰色シルト質粘土(粒状)・中位に細粒砂～極細粒砂が多く混じる。所により、炭化した植物遺体・分解の進んだ植物遺体を葉層状に含む。上部は、僅かに土壤化しており、細い根の痕跡が見られる。北壁部分では土壤化の度合が高く、炭化物粒・炭化した植物遺体が他の部分に比べて多い。下部5cmほどは、5GY4/1暗オリーブ灰色を呈する。
- 37層：7.5GY3.5/1暗緑灰色シルト混じる粘土。所により、10GY4/1暗緑灰色シルト質極細粒砂の薄層・葉層を挟む。
- 38層：10GY5/1緑灰色中粒砂～極細粒砂・細粒砂～極細粒砂の薄層・葉層と2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂・極細粒砂混じるシルト質粘土の葉層の互層。シルト質粘土部分に分解の進んだ植物遺体を葉層状に含む。
- 39層：10Y4/1灰色シルト質粘土の薄層・葉層と2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂混じるシルトの葉層の互層。所により、分解の進んだ植物遺体を葉層状に含む。
- 40層：7.5Y3/1オリーブ黒色有機質に富むシルト質粘土。所により、2.5GY5/1オリーブ灰色中粒砂以細の砂の薄層を挟む(上位のシルト質粘土とは不整合)。下位のシルト質粘土の上部は10Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂の葉層との互層をなす。西壁北側では、下位のシルト質粘土の下位に7.5Y4/1灰色有機質に富む極粗粒砂以細の砂混じるシルト質粘土～粘土質シルトが見られる。分解の進んだ植物遺体を各シルト質粘土の上面に葉層状に含む。
- 41層：10GY5/1緑灰色細礫混じる極粗粒砂～細粒砂。上部は7.5Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルトを層状に含み、その下位に細粒の中礫以細の礫混じる極粗粒砂～極細粒砂の薄層を挟む。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物

##### 第1面 (第4図、図版-1)

近世以降の水田耕作土(1～4層)の下面(T.P.+8.0m前後)で、近世から近代にかけての井戸2基(S E 101・S E 102)、土坑5基(S K 101～S K 105)、土坑状の落ち込み1箇所(S O 101)、溝状の落ち込み2箇所(S O 102・S O 103)、溝7条(S D 101～S D 107)を検出した。S E 101・S E 102・S K 102・S K 105・S D 101については1層～3層中あるいは1層上面から切り込まれた近世から竜華操車場造成時までの遺構で、その他の遺構は、4層を水田耕作土とする耕作に伴う近世の遺構と見られる。

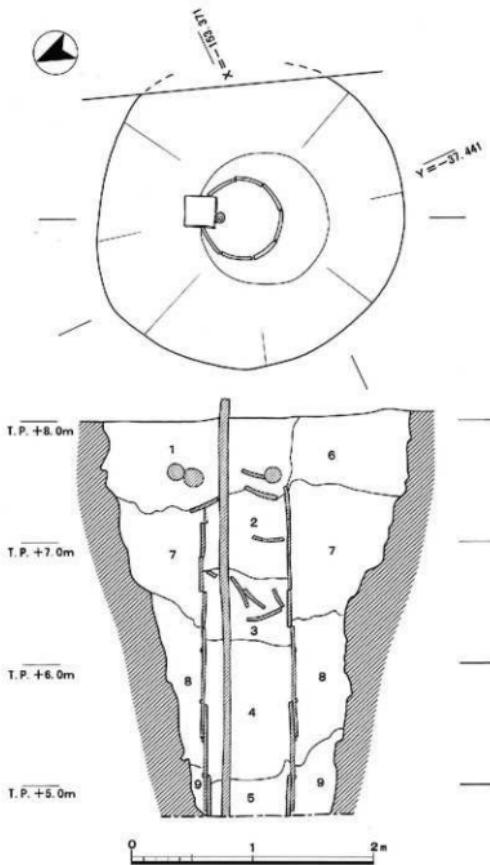
## 井戸 (S E)

## S E 101 (第6図)

調査地南部のⅧ-16-7・8FG地区で検出した。平断面の形状・法量・埋土については第4図の通りである。上に4段の瓦棒、下に3段の桶棒を検出したが、井戸側内埋土から井戸枠瓦が複数枚分出土していることから、瓦棒は5段以上あったことがわかる。底は調査掘削範囲外に至るため不明であるが、41層を取水層としたと考えられる。出土遺物は井戸側内埋土から土師器・須恵器・肥前系磁器・井戸枠瓦・掘方埋土から弥生土器が破片で出土している。帰属時期は、出土遺物から近世、廃絶時期は近代に比定できる。

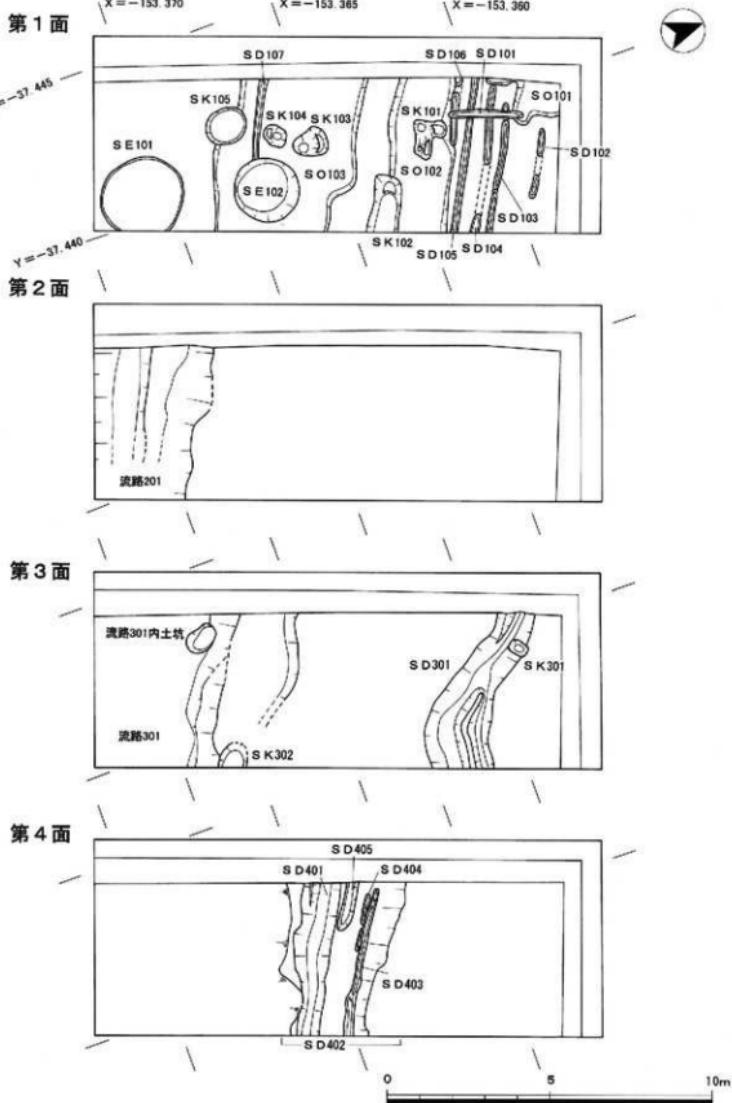
## S E 102

調査地南部のⅧ-16-7 F・G地区で検出した。平面円形を呈する。径2.0m・深さ2.55m以上を測るが、底は調査掘削範囲外に至るため、不明である。41層を取水層としたと考えられる。埋土は、検出面以下1.5mまでは、逆台形を呈する断面形状に沿ってベース層・水田耕作土に由来するブロックを主体とする3層が堆積し、それ以下に桶を抜き取った痕跡と竹製の簾が残る内側の井戸枠部分の砂質粘土質シルトを主体とする1層と、その外側の掘方部分にシリト質粘土のブロックを主体

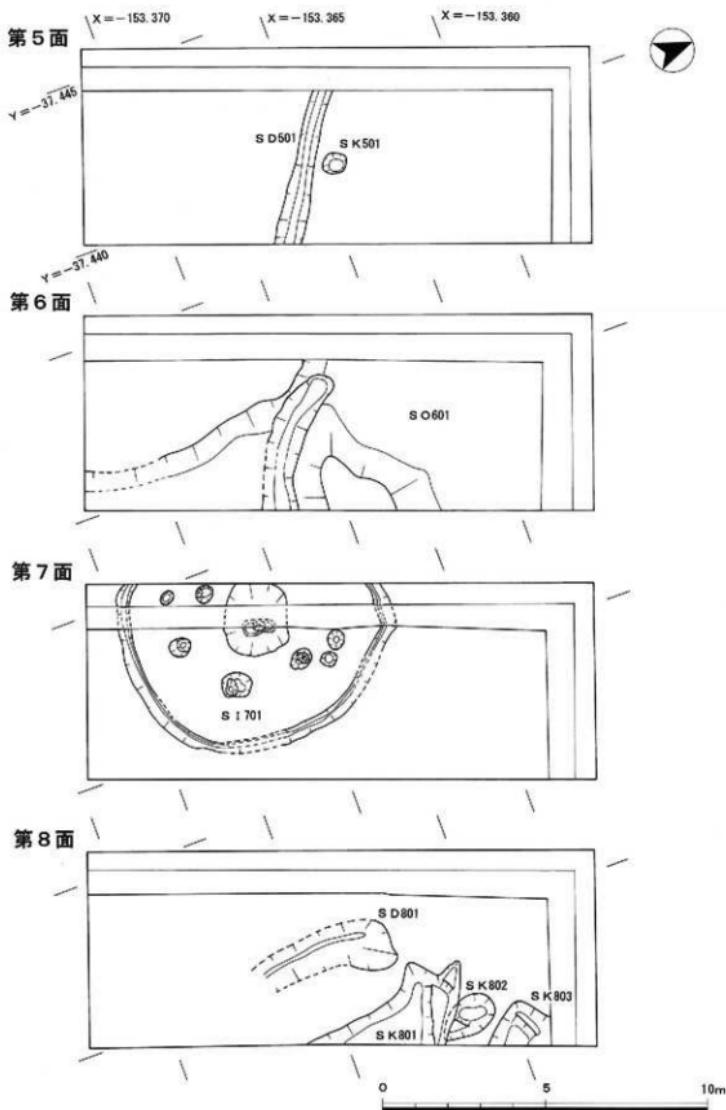


- 1 5G3.5/1暗緑色細粒混じる粘土質シルト他のブロック(φ10cm以下)
- 2 5G3.5/1暗緑色細粒の中礫以細の礫混じる砂質粘土質シルト他のブロック(φ10cm以下)
- 3 2.GY3.5/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じるシルト質粘土他のブロック(φ10~15cm)
- 4 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒の中礫混じる砂質粘土質シルト他のブロック(φ10cm以下)
- 5 10YA4/1暗色細粒砂～極細粒砂
- 6 5G3.5/1暗緑色細粒混じる粘土質シルト他のブロック(φ20cm以下)
- 7 5G3.5/1暗緑色細粒の中礫以細の礫混じる砂質粘土質シルト他のブロック(φ15cm以下)
- 8 2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒砂混じるシルト質粘土他のブロック(φ10cm以下)
- 9 5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混じるシルト質粘土他のブロック(φ5~10cm)

第4図 S E 101平断面図(S=1/40)



第5図 第1面～第4面検出構造平面図 (S=1/150)



第6図 第5面～第8面検出遺構平面図(S=1/150)

とする1層が堆積する。のことから、本来は桶枠を伴う井戸であったことがわかる。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土しているが、遺構の帰属時期を示し得ない。帰属時期は、桶枠を伴うことと埋土から近世に比定できる。

#### 土坑（SK）

##### SK 101

調査地南部のⅧ-16-7 F・G地区で検出した。平面逆L字形を呈する。東西長1.2m・南北長0.97m・深さ0.82mを測る。逆L字の内側の角に木杭が打設されている。埋土は、10Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルトに、遺構のベース層のブロックが混じり、締まりがない。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・平瓦の破片が出土しているが、遺構の帰属時期を示し得ない。人力により近世以降の水田耕作土の下部を除去していた時に、埋土上位の部分だけが周りより柔らかかったことから、構築面は近世以降の水田耕作土のうち2~4層中あるいは上面にあったと考えられる。のことから、帰属時期は近世に比定できる。

##### SK 102

調査地南部のⅧ-16-7 G地区で検出した。東側は調査区外に至るため平面形状は不明であるが、隅丸の長方形を呈するものと思われる。検出長1.75m・幅0.8m・深さ0.72mを測る。埋土は、遺構のベース層のブロックを主体とする。検出部分の中央部に0~2層の砂で径0.2m・深さ0.4m以上の柱状に充填された部分が見られ、柱状のものが立てられていて、それが抜き取られた跡と見られる。出土遺物は、土師器・須恵器の破片、ボルト止めの木材が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物・埋土から近代（竪筆操車場造成以前）に比定できる。ちなみに、SE 101埋土の最上層（第6回1層）から針金で巻かれた2本と1本のマツの丸太が出土しており、針金は北側に傾いて埋まっていた。のことから、針金で巻かれた2本のマツの丸太は、SK 102に立てられた柱状のもの（電柱）を支えるアンカーであった可能性が高い。

##### SK 103

調査地南部のⅧ-16-7 F地区で検出した。平面不定形で、南北長1.05m・東西長0.90m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は、10Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルトに、遺構のベース層のブロックが混じり、底面に5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂の薄層が堆積する。出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土しているが、遺構の帰属時期を示し得るものではない。遺構の帰属時期は、埋土から近世に比定できる。

##### SK 104

調査地南部のⅧ-16-7 F地区で検出した。平面不整円形で、長径0.75m・短径0.52m・深さ0.44mを測る。埋土は、遺構のベース層のブロックに10Y4/1灰色極細粒砂～中粒砂が混じる上層と、10Y4/1灰色砂質粘土質シルトにベース層のブロックが混じる下層の2層に分けられる。出土遺物は、下層から肥前系磁器が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から近世に比定できる。

##### SK 105

調査地南部のⅧ-16-7 F地区で検出した。平面不整円形で、長径1.25m・短径1.05m・深さ0.8mを測る。埋土は、遺構のベース層と上位層のブロックを主体とし、ブロック土の種類・多寡によって、木桶を抜き取った痕跡と竹製の籠が残る部分の内側が2層に、その外側の掘方部分

が2層に分けられる。出土遺物は、枠内埋土・掘方埋土から土師器・須恵器・瓦器の破片が、掘方埋土の下層から寛永通宝が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から近世に比定できる。肥溜めであったと考えられる。

### 落ち込み(SO)

#### SO101～SO103

全て南東～北西方向に伸びる。これらの落ち込みは近世の水田耕作に伴い形成されたものである。各落ち込みの規模・埋土等については、第1表に示した。

第1表 SO101～SO103法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅	深さ	埋 土	出土遺物
SO101	Ⅳ-16-6F-G	2.25	1.40	0.11	5G1/1暗緑灰色細緻以繊の砂疊 混じる粘土質シルト(4層)	須恵器片
SO102	Ⅳ-16-7F-G	4.80	2.00	0.10	※	土師器片
SO103	Ⅳ-16-7F-G	4.73	4.35	0.20	※	土師器・須恵器・瓦器・ 肥前系磁器片

### 溝(SD)

#### SD101～SD107

主に、調査地北部で検出したもので、SD102～SD107が南東～北西方向に伸び、SD101がSD101・SD103～SD106を切る形で南西～北東方向に伸びる。これらの溝は、近世の水田耕作に伴う鑿溝である。各溝の規模・埋土等については、第2表に示した。

第2表 SD101～SD107法量表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅	深さ	埋 土	出土遺物
SD101	Ⅳ-16-6TG	2.27	0.25	0.05	10GY3.5/1暗緑灰色シルト質粘土	土師器片
SD102	Ⅳ-16-6G	2.15	0.18	0.04	5G1/1暗緑灰色細緻以繊の砂疊 混じる粘土質シルト(4層)	土師器片
SD103	Ⅳ-16-6TG	4.05	0.20	0.05	※	須恵器片
SD104	Ⅳ-16-6F-G,7G	4.62	0.25	0.07	※	土師器片
SD105	Ⅳ-16-6FG,7 F-G	4.83	0.20	0.06	※	土師器片
SD106	Ⅳ-16-7FG	2.10	0.25	0.04	※	
SD107	Ⅳ-16-7F	2.45	0.20	0.04	※	須恵器片

### 第2面(第4図、図版一)

5層を除去した9層上面(T.P.+7.9m前後)で、奈良時代前期から平安時代前期に比定できる流路1条(流路201)を検出した。

### 流路(流路)

#### 流路201(第7図、図版一・三)

調査区南部のⅣ-16-7・8F・G地区で検出した。検出部分で、長さ4.85m・幅3.65m・深さ0.7mを測る。この流路は、周辺の調査区においても検出されており、当調査地の南部を東南東側～北北西方向にほぼ直線的に伸びる。埋土については、第8図の通りであるが、概ね、砂質